

第43回

南北海道考古学情報交換会

発表資料集



令和4年12月3日（土）～4日（日）
於 函館市中央図書館・視聴覚ホール・大研修室

第Ⅰ部

情報交換 1

箱館戦争戦跡遺構の現状と今後 ～川汲台場・二股台場と開陽丸～



川汲台場の塹壕群が語る旧幕府軍の戦術

箱館戦争戦跡調査プロジェクト

石井淳平

2022年12月3日

1 川汲台場及の位置

川汲台場は函館市湯の川と同市川汲を結ぶ川汲峠周辺尾根に所在します（図1）。汐泊川上流の日本海と分水嶺を形成する尾根の鞍部を川汲旧道がとおり、これを南北に挟むように尾根上に塹壕群が構築されています。標高491mの台場山からNHK電波塔付近までの尾根上で11基の塹壕を確認しました。

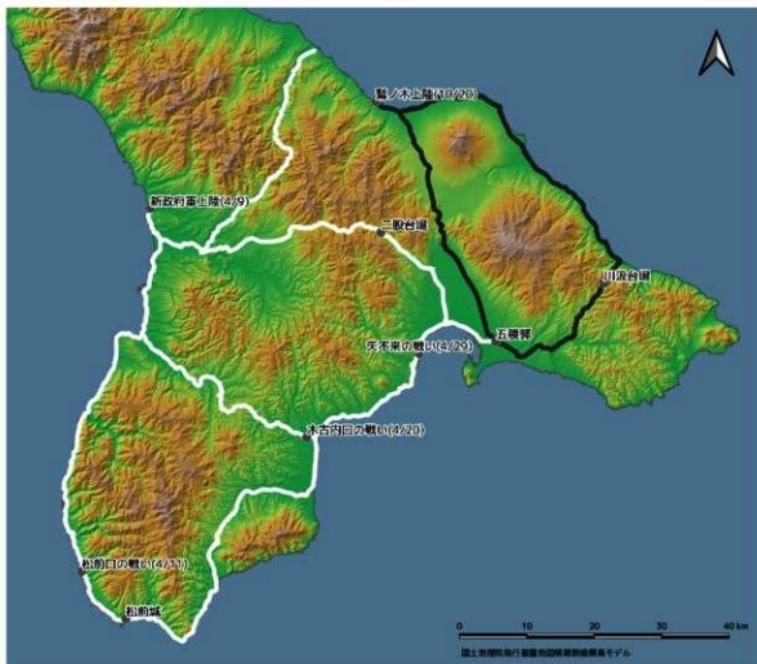


図1 川汲台場の位置と箱館戦争

2 塹壕配置と概要

川汲山道を挟む尾根上で 11 基の塹壕を検出しました（図 2）。

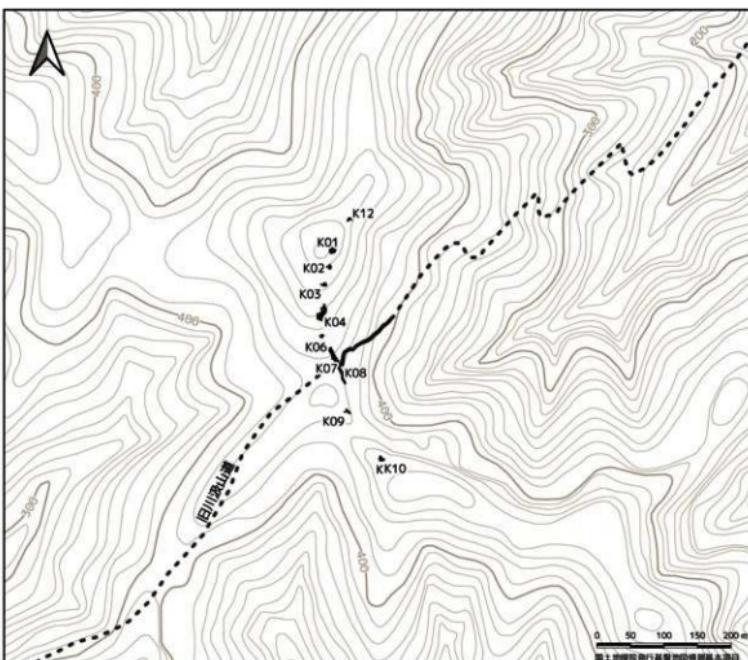


図 2 川汲台場検出塹壕位置図

このうち、川汲山道の北側に位置する台場山山頂に K01、台場山山頂と川汲山道までの尾根に K02～K06 の 5箇所の塹壕があります。また、川汲山道を挟むように K07 と K08 が構築されています。2つの塹壕は延長 25m を超え、川汲台場中最大の塹壕です。川汲山道南側尾根には K09～K11 の 3箇所の塹壕があります。南側尾根最高所の K11 の南東にも尾根は続いていますが、NHK の電波塔が建設され、当該箇所の塹壕の有無は確認できません。



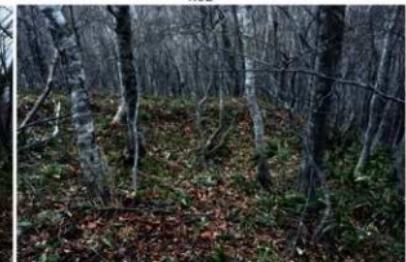
K01



K02



K03



K04



K05



K06



K10

図3 川汲台場塹壕調査状況（1）



K07



K08

図 4 川汲台場塹壕調査状況（2）



図5 川汲台場塹壕調査状況（3）

3 可視領域

3.1 K01（図6上）

K01は台場山の山頂に位置し、川汲山道南北両側の尾根に視界が効きます。川汲方面全体の眺望はこの塹壕がもっとも優れています。

3.2 川汲山道北側塹壕群（図6下）

本塹壕群（K02・K03・K04・K05・K06）は川汲山道北側尾根線と南側尾根の川汲方面に視界が効きます。川汲山道南側にはK09～K11の3箇所の塹壕が検出されており、本塹壕群はこれら南側塹壕群とその北東斜面を視界に入れます。本塹壕群の主たる機能は、川汲山道南側塹壕群の北東側斜面に対して側面から支援するものと推測します。

また、K03やK05では、土壘構築方向が南側、すなわち北側尾根のフォールラインに向けて構築されており、川汲台場前面（東側）だけでなく、川汲山道正面塹壕（K07・K08）が突破された場合の第二線陣地としての機能が想定されます。

3.3 川汲山道正面塹壕群（図 7 上）

本塹壕群（K07・K08）は、川汲台場で最大の塹壕である K07 と K08 により川汲山道を挟んで構成されます。川汲山道を中心とした狭い範囲に可視領域が限定されることから、川汲山道正面防禦が本塹壕群の主たる機能と推測します。また、北側尾根、南側尾根の東側にも視界が効き、川汲山道北側塹壕群や川汲山道南側塹壕群を攻撃する敵に対して側面射撃が可能な位置取りとなっています。

3.4 川汲山道南側塹壕群（図 7 下）

本塹壕群（K09・K10・K11）は川汲山道に対して広範囲に視界が効きます。主たる攻撃路である川汲山道を側面から射撃するとともに、正面塹壕群や北側塹壕群への攻撃に対して側面射撃を行う機能も期待されたと推測します。本塹壕群から距離 400m 圏内に川汲山道の延長約 360m が含まれ、川汲山道上の的を長時間射程に捉えることが可能です。

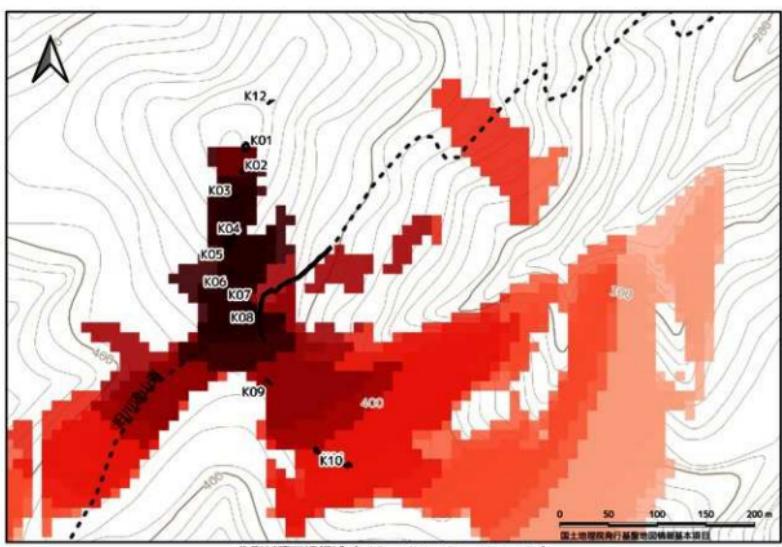
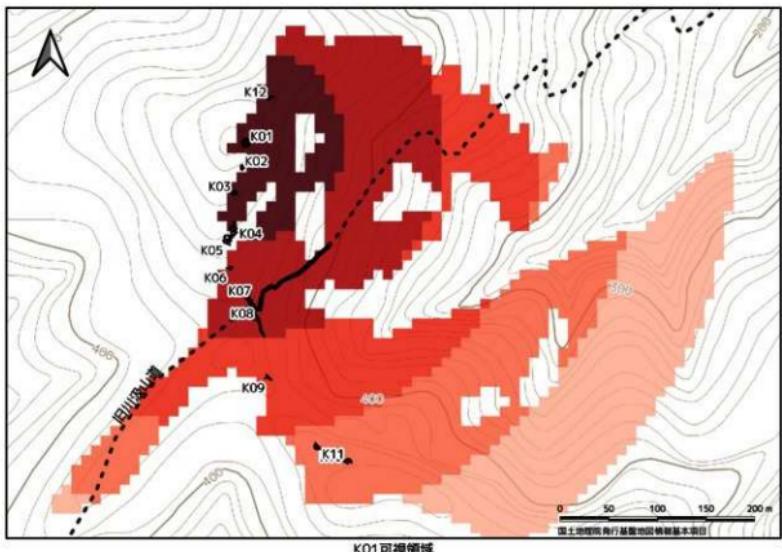


図 6 塗壁可視領域（1）

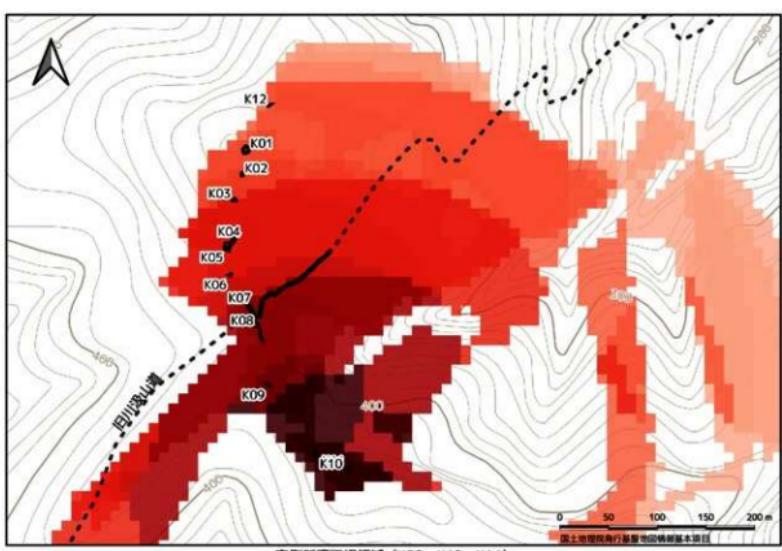
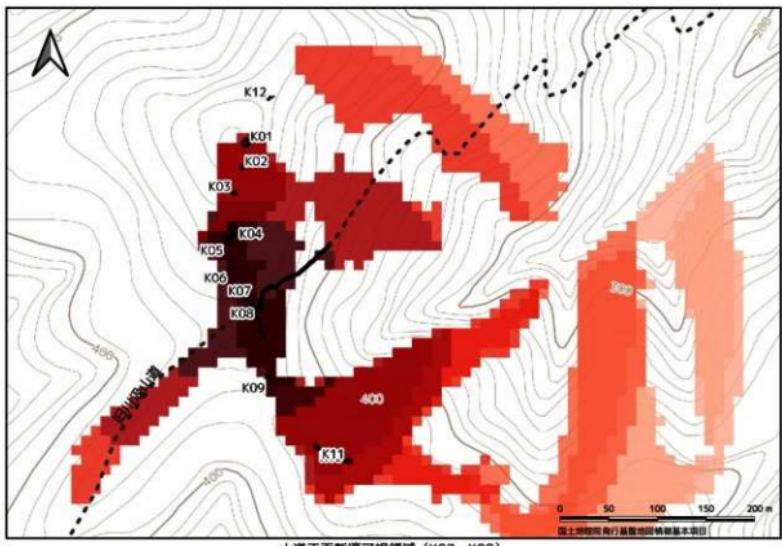


図7 塗壕可視領域 (2)

4まとめ

川汲台場の特徴は、塹壕群同士が側面射撃によって互いに援護し合う仕組みが徹底されている点です。

特に北側塹壕群と南側塹壕群では直下の尾根を登坂する敵に対して直接攻撃を行うことが難しい位置に塹壕が構築されています。すなわち、各塹壕が直接敵と対峙するのではなく、互いに他の塹壕群の側面支援を行なうべく配置されています。唯一、川汲山道正面塹壕群のみは川汲山道を侵攻する敵に対して正面から対峙する位置関係にありますが、有効な射角を確保できる区間は短く、大軍が一気に押し寄せた場合、これを防ぎることは困難と考えられます。こうした弱点を補うために、川汲山道に対して長く有効な射角を確保できる南側塹壕群やK01 塹壕が構築されたと推測します。

側面射撃を防御射撃の基礎とする陣地は、塹壕守備側からみると自塹壕正面の敵に対しては他塹壕の支援を頼りにするほかなく、自塹壕正面に対する視界が限られていることとあわせて、各塹壕の孤立感が高いとされます（樋口 2018）。すなわち、それぞれの塹壕の守備兵が各塹壕の機能を理解し、相互支援に対する高い信頼を有することが不可欠となります。川汲台場は、そのような高い信頼を個々の塹壕守備兵が有することを前提とし、各塹壕が築城主体の意図どおりの役割を果たすことではじめて台場全体の防衛が可能になる塹壕配置といえます。

川汲台場は施条銃の高い命中率と長い射程を活かした野戦築城であり、戊辰戦争を通じて獲得した当時の軍事技術を具現化した遺構として、北斗市二股台場と並んで、当時の軍事技術の到達点を示す貴重な箱館戦争戦跡です。

引用・参考文献

- 石井淳平・野村祐一・塙田直哉・時田太一郎 2020『北斗市二股台場の測量調査-箱館戦争戦跡の考古学的調査-』『北海道考古学』第 56 帯, pp. 35-54
- 今井信郎『北国戦争概略衝鋒隊之記』, 1998『南柯紀行・北国戦争概略衝鋒隊之記』新人物往来社, pp. 159-184
- 今井信郎『蝦夷之夢』, 1998『南柯紀行・北国戦争概略衝鋒隊之記』新人物往来社, pp. 186-228
- 今井信郎『衝鋒隊戦争略記』, 須藤隆仙編著 1996『箱館戦争史料集』新人物往来社, pp. 80-86
- 大島圭介『南柯紀行』, 1998『南柯紀行・北国戦争概略衝鋒隊之記』新人物往来社, pp. 230-258
- 河野常吉 1924『北海道史蹟名勝天然記念物調査』, 北海道立図書館所蔵, 1974 年復刻版『北海道史蹟名勝天然記念物調査』名著出版, pp.61-62
- 小林露竹編 1967『北海道渡島南茅部町史年表』南茅部町教育委員会
- 樋口隆晴 2018『第十一章 ノモンハンの戦い 金井塙大隊の帰還-歩兵第六十四連隊第三大隊の防禦と退却』『戦闘戦史-最前線の戦術と指揮官の決断』作品社, pp. 227-253
- 八巻孝夫 2017『箱館戦争の台場-道南・東部と函館周辺の野戦築城を中心に』『中世城郭研究』第 31 号, pp. 102-126

2022年12月3日

「箱館戦争跡遺構の現状と今後

—川汲台場・二股台場・開陽丸—】

江差港にねむる開陽丸

江差町教育委員会 学芸員 小峰彩椰

■開陽丸概要

- 1854年（安政1） 日米和親条約を締結。
→海軍力の強化が必要に
- 1862年（文久2） オランダに軍艦を発注。
→1865年に船完成後、艤装
- 1867年（慶応3） 横浜港で幕府に引き渡される。
→国内の情勢が変わり、戊辰戦争に巻き込まれていく
- 1868年（明治元） 旧幕府軍の軍艦として蝦夷地へ。
→箱館戦争の際、援軍でやって来た江差で沈没

■発掘調査（昭和50年～）

- 開陽丸沈没後、幾度となく引き揚げが試みられる
- ～昭和初期まで 武器・金属目的での引き揚げ作業
- 1972年（昭和47） 江差港（開陽丸推定地点）に防波堤が完成。
- 1974年（昭和49） 埋蔵文化財としての潜水調査を実施。
→大量の砲弾や船体の一部らしき木材を発見
- 1975年（昭和50） 本格的な海底の発掘調査を開始。
→33,000点近くの遺物を引き揚げ
- 1989年（平成1） 大型船体は海底で保存することに。
→海中生物の食害を防ぐため、銅製の網で覆う
- ～2012年（平成24） 定期的に船体の現状確認調査を実施。

2022年12月3日

「箱館戦争跡遺構の現状と今後

—川汲台場・二股台場・開陽丸一】

■現状確認調査（令和4年度）

【調査内容】

①船体の現状確認

- ・ヘドロの除去作業

海底の状況：ヘドロや廃棄物が堆積



銅網を確認するにはヘドロ除去が必要

→ウォータードレッジで掘削

➡ 4日間かけて船体の3分の1の範囲を除去（資料2）

[ヘドロを除去してみると・・・]

ヘドロ下の状況：銅網のずれや剥離

銅網下にシートを被せている箇所とシートがない箇所

=船体がむき出しの状態

- ・船体の目視や触診

→フナクイムシと考えられる白い付着物

→木材が柔らかく変質

➡腐朽が進行している



むき出しになった船体

②船体の保存環境を把握

- ・水中溶け込む酸素量を計測

なぜ？：溶存酸素は海中生物の活動に必要だから

- ・データロガーを2カ所に設置

→銅網の外側と内側（資料2）

➡2カ所のデータを比較して保存環境を把握

- ・銅網を用いた船体の保存方法は、国内で開陽丸のみ

➡本調査による船体の保存環境モニタリングは、今後、

2022年12月3日

「箱館戦争跡遺構の現状と今後

—川汲台場・二股台場・開陽丸一】

国内における船体の現地保存の方法を確立させるうえで重要

②‘銅網サンプルの採取

被覆された銅網3点（No.1, No.2, No3）

銅網がはがれて海中にむき出しになった木材に付着していた銅網（No.4）

→計4点を研究機関に送付、分析を依頼

【調査まとめ】

●海底はヘドロや廃棄物が堆積して多く堆積していた

→保存中船体の3分の1の範囲をヘドロ除去し銅網面を確認

●海底保存中船体の一部では、銅網が剥離して虫害対策が

なされていない状況

→船体の保存環境は良好と言い難い箇所がある

●銅網が剥離した箇所の船体では、フナクイムシによる食害や微生物による腐食を確認

→船体の劣化が進行している

●溶存酸素を計測するデータロガーを銅網内外の2カ所に設置

→令和5年3月に回収予定

●銅網のサンプルを分析して劣化状況を把握

→分析結果待ち

●ロガーのデータと銅網の分析結果は、

今後、船体の保存方法を検討する参考データとなる

●銅網による保存環境のモニタリングは、国内の水中遺跡の現地保存方法を確立するための実験的意味をもつ

2022年12月3日

「箱館戦争跡遺構の現状と今後

—川汲台場・二股台場・開陽丸—」

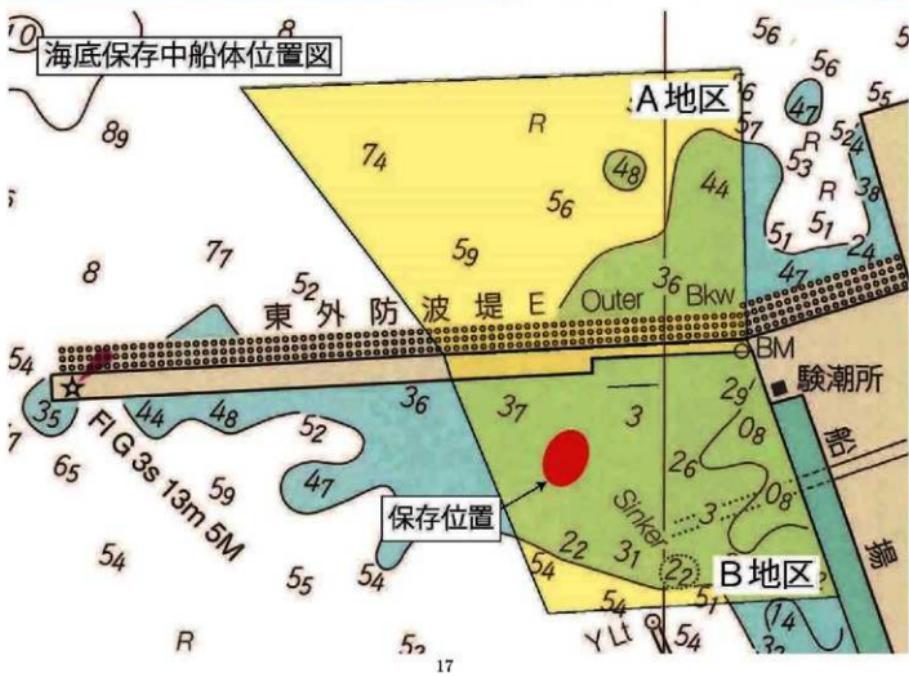
■今後の取り組み

- ・引き続き、現状確認を実施
 - 現状確認で得た情報から船体に最適な保護方法を選択
- ・“遺跡”や“海底保存されている船体”的存在が知られていない
 - 多くの人に開陽丸の実際を知ってもらう
- ・その時々で最適な保存方法をとる
 - なぜ引き揚げないのか？
 - 保存技術／費用を鑑みて、海底保存が最適だから
 - ・引き揚げた遺物と開陽丸遺跡は文化財
 - 文化財保護法が適用
 - ・文化庁も、水中の遺跡保護に力を入れはじめている
 - 令和5年度新しい補助金
 - ・ゆくゆくは、海底保存船体の活用を…
 - 活用方法の検討

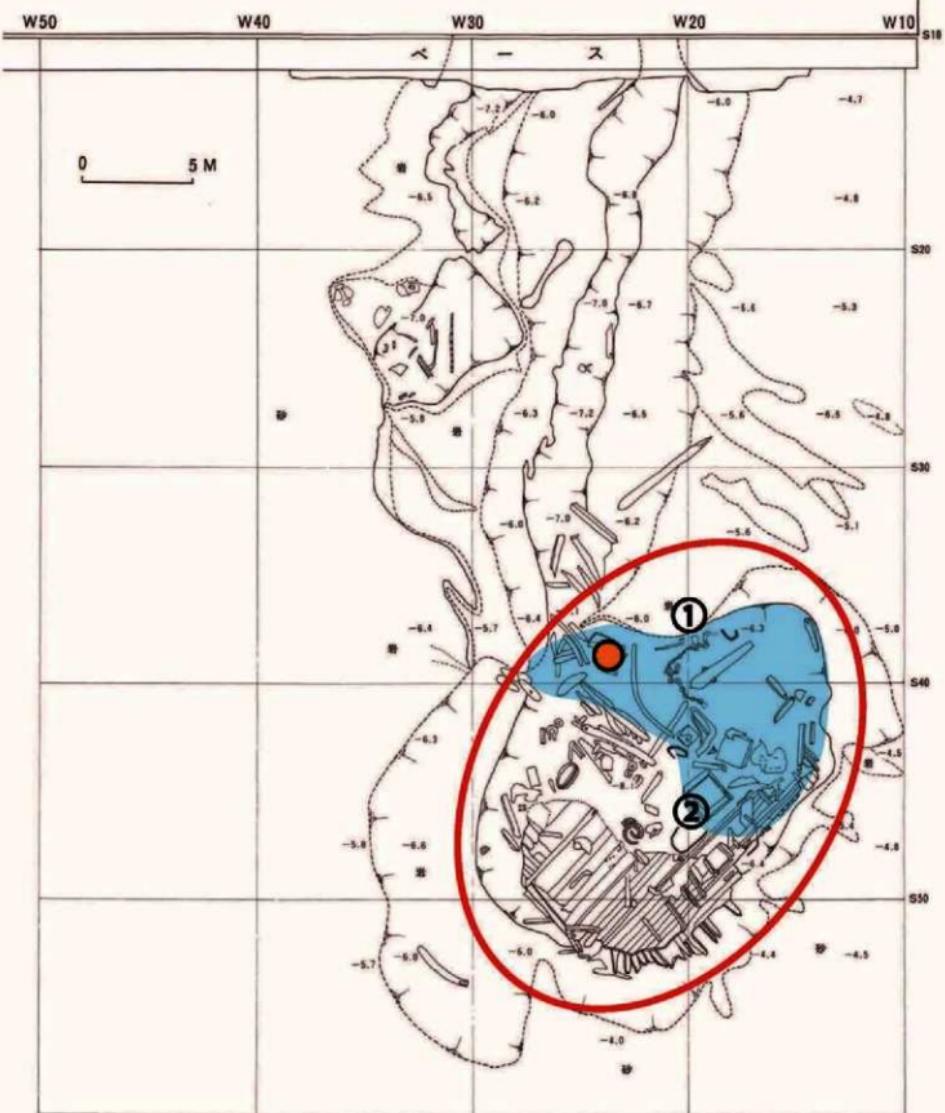
C-01-62 開陽丸位置図



⑩ 海底保存中船体位置図



堤防



…・船体保存範囲（調査対象範囲）



…・ヘドロ除去範囲



…・銅網がはがれて船体が露呈していた地点



…・データロガーセット個所 (海中)¹⁸



…・データロガーセット個所 (銅網の下)

北斗市二股台場にみる土方歳三の防衛戦略

箱館戦争戦跡調査プロジェクト 石井淳平

2022年12月3日

1 はじめに

北海道の南西部、北斗市山中の台場山に、「二股台場」（北海道教育委員会埋蔵文化財包蔵地「台場山遺跡」（B-06-102））として知られる塹壕群が残されています。これらの塹壕は、明治2年（1869）の戦いで旧幕府軍によって構築されたと伝えられており、箱館戦争の戦跡としてだけではなく、城郭史研究の視点からも重要な遺跡です。

古くは、北海道庁の河野常吉による調査が大正11年（1922）に行われ、大正13年の『北海道史跡名勝天然紀念物調査報告書』（河野 1924）により報告されています。また、2012年には、毛利剛（函館市在住）により塹壕の踏査が行われ、GPSによる位置記録、塹壕の略測図が作成されました（毛利 2012）。

本調査ではこれまで知られている台場山周辺の塹壕群について、既知の塹壕跡のうち11箇所と新発見の塹壕跡2箇所の測量調査を実施しました。また、新政府軍の構築と考えられる新たな塹壕を発見しました。その結果、塹壕群は明確な役割分担をもとに計画的に配置され、施条銃を用いた戦闘様式に基づいて、正面防御と側面射撃を組み合わせた合理的な野戦築城が行われたとの結論が得られました。

2 明治2年箱館戦争と二股台場の位置

2.1 明治2年箱館戦争

明治2年4月9日、旧幕府軍に占領された蝦夷地奪還のため、新政府軍は北海道南西部の乙部に上陸しました。新政府軍の攻撃軸は松前口、二股口、安野呂口の3本が設定され、南蝦夷地の要衝である江差、松前を経て箱館へ至る松前口とそこから分岐した木古内口に最大の兵力が割かれました。二股口は松前口に次ぐ兵力が派遣されました（図1）。二股口は険しい山道の進軍を余儀なくされますが、強固な防御拠点もなく、兵力に乏しい旧幕府軍の分断と各個撃破を図ったものと考えられます。

2.2 二股台場の位置

二股台場は北斗市大野町市街地から北西約10km上流の大野川左岸、大野川とその支流である二股沢川の合流点付近に位置します（図2）。大野市街地から二股沢川付近までは大野川に沿って平坦な地形が続きますが、二股台場塹壕群の所在する尾根を境に、これより上流では尾根と谷が交互に現れる急峻な地形となります。

二股台場塹壕群は標高261mの台場山と、これと一連の尾根をなす339m峰との間の尾根上に確認され



図1 明治2年箱館戦争と二股台場の位置

ており、二股沢川と並行して北方から大野川にむかって下る尾根上に塹壕群が並びます。最高地点に立地する塹壕（F15）は標高約330m、最低地点に立地する塹壕（F16）は約200mです。尾根の鞍部を旧道である「鶴山道」が横切っており、塹壕群は鞍部をはさんで南北に分かれ配置されます。

新政府軍の攻撃正面となった尾根の西側斜面は鶴山道南側では平均傾斜約20度、鶴山道北側では約30度の急斜面となっています。

2.3 文献からみる二股台場の戦い

二股台場の戦闘は4月13日から4月14日にかけて行われた第一次会戦と、両軍が兵力を増強して行われた4月23日から4月25日の第二次会戦の2回の戦闘に分けられます。

第一次会戦は、二股台場から約km西方の天狗岳前哨陣地を新政府軍が攻撃したことから発生し、たちに二股台場をめぐる攻防へと移行します。戦闘は13日夕刻から夜通し継続し、翌14日早朝、新政府軍は撤退する。第一次会戦時の旧幕府軍戦力は約130名、新政府軍は600名以内と推測されます。

第二次会戦は、双方とも兵力を増強し4月23日夕方から新政府軍の攻撃により開始されました。旧幕府軍の兵力は戦闘開始後の増援も含めて最大400名、新政府軍は1,000名と推測されます。新政府軍は、旧幕府軍の3倍近い兵力を投入していますが、逐次投入の感が否めず、當時、二股台場と対峙した兵力は600名程度です。この間、旧幕府軍増援部隊（伝習士官隊）の突撃により、旧幕府軍前線が一時敗走する場面がありますが、両軍とも致命的な打撃を与えられないまま、4月26日早朝に新政府軍が撤退し、第二次会戦は終了します。

その後、二股台場をめぐる大規模な戦闘は発生せず、4月29日の矢不來での敗戦の報が二股台場にもた



図 2 二股台場周辺の地形

らされたことから、旧幕府軍は二股台場が戦略的価値を失ったと判断し、4月30日早朝、五稜郭へ撤退しました。

表1 二股台場における戦闘経過

| 日付 | 内容 |
|---------------|---|
| 4月 6日 | 新政府軍青森新発 |
| 4月 9日 | 新政府軍乙部上陸。軍を二手に分け、一方は海岸から松前方面、うち一方は江差から山中を越え函館平野・五稜郭を目指す。 |
| 4月 9日～12日 | 新政府軍進撃の報に接した旧幕府軍は間道途上・二股の地に軍を進め、胸壁（暫塹）を築く。 |
| 4月 13日 午後3時頃 | 長州藩・福山藩・松前藩が天狗岩の旧幕府軍陣地へ襲来。同地の胸壁3ヶ所は全て陥落する。 |
| 同日 夕刻 | 新政府軍は勝ちに乘じ進軍、夕刻頃に下二股へと到達する。守る旧幕府軍は自陣近くまで敵を誘い込み、機を見て各胸壁から一斉に攻撃を開始した。旧幕府軍は台場山尾根の防衛線上を敵が攻める場所に応じて移動して守る戦術を基本とし、固く守った。 |
| 同日 午後10時 | 戦況の打開のため、別働隊による奇襲作戦が土方歳三により立案され、衝鋒隊半小隊25名が渡渉し、新政府軍の背後に廻りこんだ。 |
| 4月 14日 早朝 | 新政府軍撤退。厚沢部稻倉石（現厚沢部町字木間内付近）まで後退。その後、一部の兵力を天狗岩付近に派遣し旧幕府軍と対陣する。 |
| 4月 15日～25日 | 両軍とも部隊の再編成が行われ、新政府軍では岡山藩一中隊・薩摩藩一中隊・徳山藩一中隊の増援が行われ、旧幕府軍では見国隊1中隊、伝習歩兵隊本隊の増援が行われた。 |
| 4月 23日 午後5時頃 | 偶発した旧幕府軍斥候と新政府軍との交戦をきっかけとし、夕方頃より新政府軍が下二股への攻撃を開始。総兵力はおよそ500名程度と推定され、長州藩が主力を務め、福山藩は右翼（台場山低峰側）、正面、岡山藩は間道をはさみ左翼（台場山高峰側）に展開する。 |
| 同日 午後8時 | 岡山藩が半隊を戦線に追加投入 |
| 同日 午後11時 | 弘前藩が前線到着。福山藩のうち正面を攻める小隊と、長州藩のうち左翼を攻める小隊とそれぞれ交代し、攻撃を継続する。 |
| 4月 24日 午前10時頃 | 旧幕府軍・瀧川充太郎が伝習官隊を率い合流。即座に新政府軍への突撃を敢行し、新政府軍の指揮官を負傷させ、戦線を一時押し下げる。士官隊も少なくない被害を出している。 |
| 同日正午 | 薩摩藩が到着し正面・右翼に兵を展開 |
| 同日 午後2時 | 松前藩が合流し、薩摩・福山・弘前とともに山の半腹を攻め始め、新政府軍側の兵力は推定800名と旧幕府軍の倍に達する。この頃には瀧川の突撃による優勢は押し戻されている。 |
| 同日 夕刻 | 徳山藩も到着し、岡山藩と合流し攻撃を開始、新政府軍の展開兵力は最大に達する。 |
| 同日 日没前後 | 長州藩・薩摩藩により下二股台場の一角（軍配置から見て低峰側と推定される）が奪取され、旧幕府軍が一時混乱するも土方歳三らが督戦し軍を律し戦線を維持する。 |
| 4月 25日 午前0時 | 疲弊の激しい松前藩が前線を撤退 |
| 同日 午前2時～3時 | 新政府軍全線に撤退命令が発せられ、新政府軍が撤退出動に移る。 |
| 同日 午前6時頃 | 追撃した旧幕府軍の小勢が午前6時ごろ天狗岳に進むも迎撃され撤退 |
| 04月 29日 | 矢不來口の旧幕府陣地が破られ、新政府軍が有川に進出 |
| 4月 30日 早朝 | 旧幕府軍、二股台場を放棄して五稜郭に撤退 |

3 二股台場周辺の土地傾斜と塹壕群の配置

3.1 塹壕群と土地傾斜

塹壕群は二股川と平行に南北に延びる台場山と339m峰間の尾根上に位置します。二股川の河岸から尾根の頂部までは直線距離で約200mです。鶴山道北側では尾根の西面は40度を超える急傾斜となっており、直接の登攀は非常に困難である一方、鶴山道南側では尾根の西面は最も傾斜の急な地点でも25度前後で、容易に登攀が可能です（図3）。

塹壕群は配置と指向する方向（主に土塁を設ける方向）によって4群に区分しました。



図3 二股台場の塹壕配置と地形

3.2 塹壕群の分類とその役割

3.2.1 丘陵南端塹壕群（図4上）

丘陵南端塹壕群を構成する塹壕のうち、F04は尾根上に位置し、3つの塹壕のうち最高所にあります。F18及びF20を俯瞰できる位置にあることから、F04支援の前進陣地としてF18及びF20が構築されたものと推測します。F18とF20は隣接して構築されており、直接的なコミュニケーションが可能な位置関

係にあります。戦闘時には、最高所の F04 から広域の戦況を把握し、F18、F20 を前進陣地として 3 つの塹壕が連携して機能したと考えられます。

3.2.2 鶴山道南側塹壕群（図 4 下）

鶴山道南側に位置する F01 から F03 までは直線距離で 148m あり、この間には塹壕が検出されていません。F03 正面は傾斜角 10 度未満の緩斜面が広がり、二股台場の中でもっとも地形的に攻略が容易な箇所となっているにもかかわらず、F01 を含めて 2 箇所しか塹壕が確認されていないことは、未検出の塹壕があると考えるのが自然でしょう。

3.2.3 鶴山道正面塹壕群（図 5）

新政府軍の攻撃路にあたる鶴山道正面に位置することから、複雑で規模の大きな塹壕で構成されます。F19 は長方形の竪穴であることから、他の塹壕とは異なり、内部に建物が設置されていた可能性もあります。F12 は F19 の山側直上の平坦面に位置しており、F19 を支援しつつ F01 とともに鶴山道に対して抑止力を発揮していたものと考えます。

3.2.4 鶴山道北側低位塹壕群（図 6 上）

本塹壕群の所在する鶴山道北側尾根は、鶴山道正面塹壕群の手前に張り出すように位置します。本塹壕群の西側及び南側斜面は 40 度以上の急傾斜となっており、この方向からの攻略は極めて困難です。本塹壕群は二股沢川方面からの攻撃に対する優位を確保しつつ、鶴山道正面塹壕群及び鶴山道南側塹壕群を攻略する敵を側射する位置を選定したものと考えます。

3.2.5 鶴山道北側高位塹壕群（図 6 下・図 7）

本塹壕群は鶴山道北側の高位の尾根上に位置します。いずれも、二股川方向に土壠を有します。本塹壕群の位置からは鶴山道は視認できず、鶴山道低位塹壕群やその他の塹壕群と直接的な支援を行いたい得る位置関係にはありません。二股川対岸の敵の動きを牽制し、二股川上流を迂回しようとする動きを妨害する目的で構築されたものと推測します。

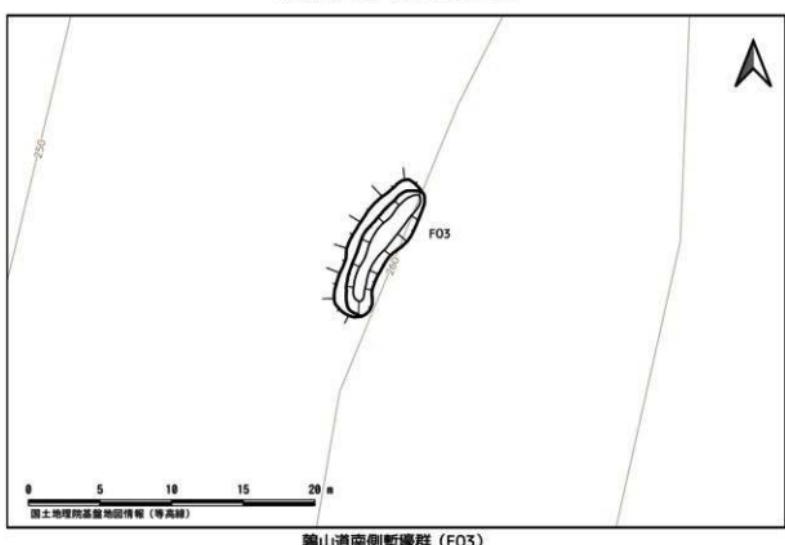
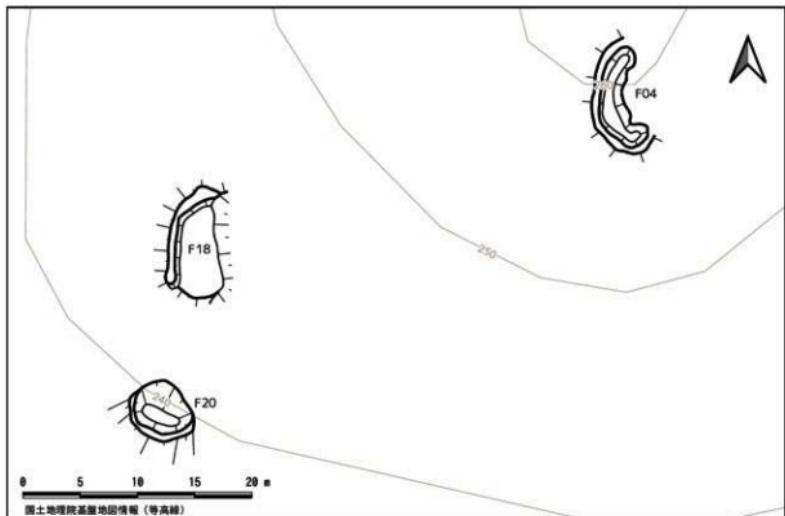


図 4 塹壕配置図 (1)

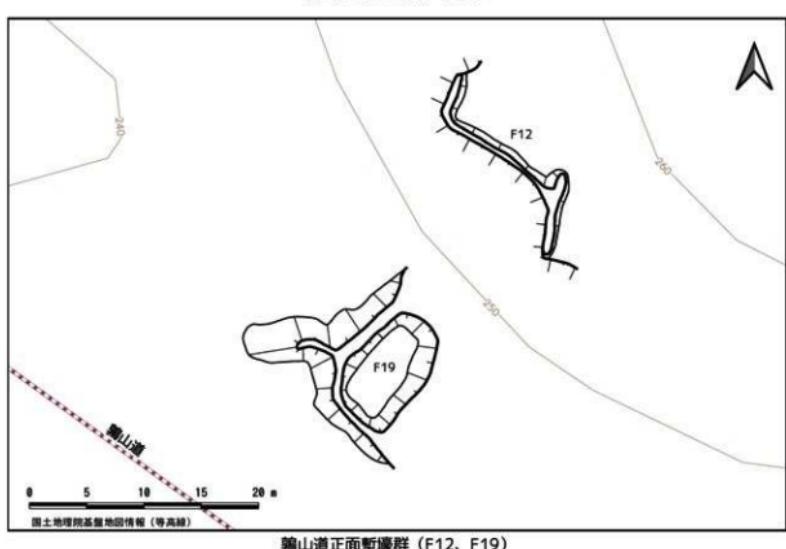
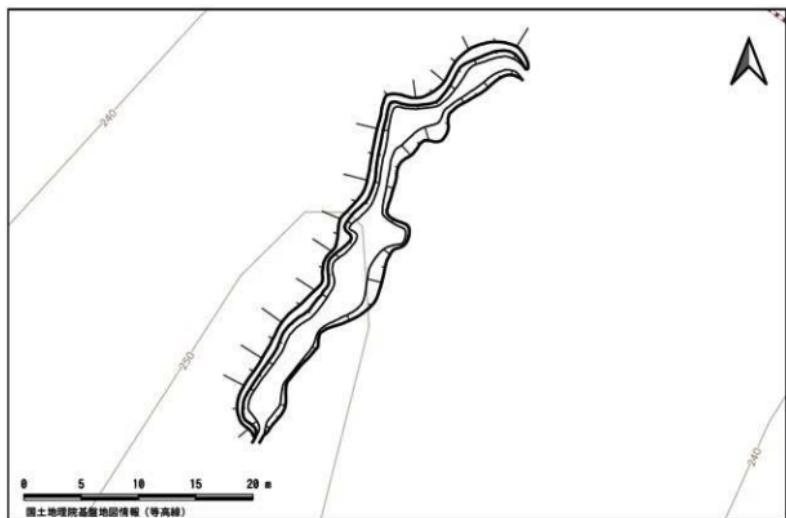
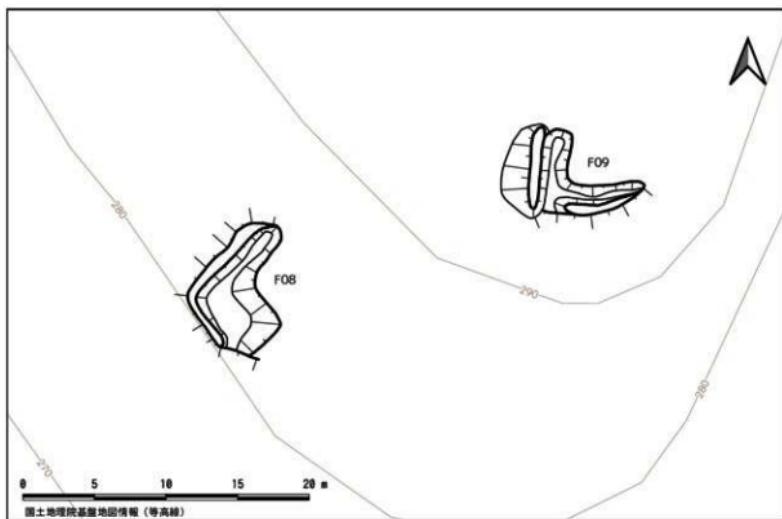
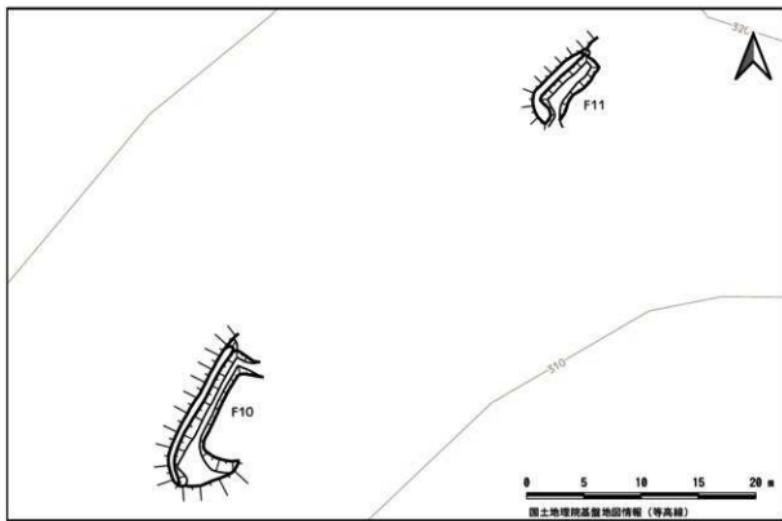


図 5 塁壕配置図 (2)



鶴山道北側低位斂壕群 (F08、F09)



鶴山道北側高位斂壕群 (F10、F11)

図6 斂壕配置図 (3)

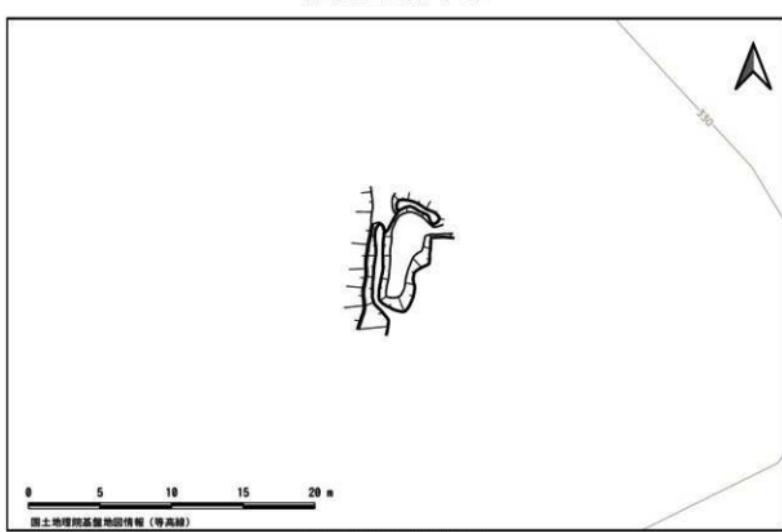
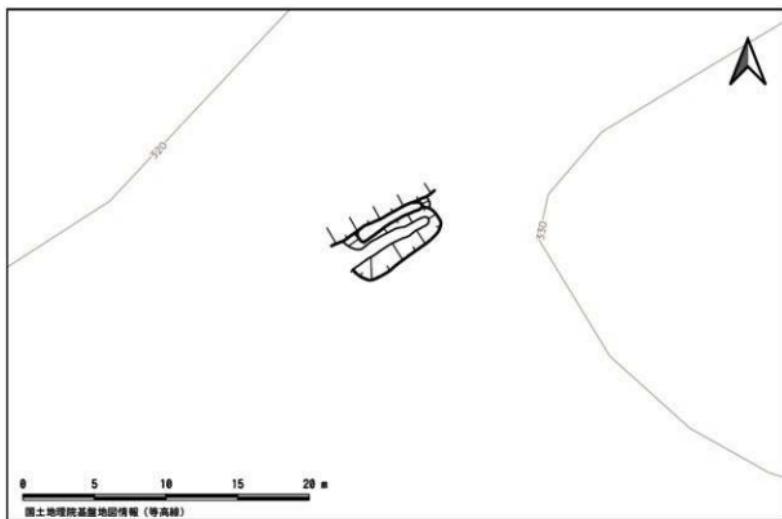


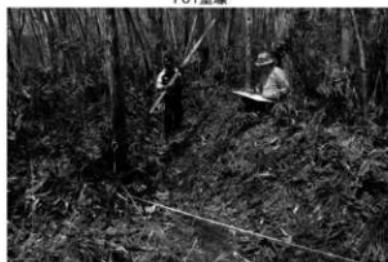
図 7 塹壕配置図 (4)



F01 墓塚



F03 墓塚



F04 墓塚



F09 墓塚



F11 墓塚調査風景



F11 墓塚



F13 墓塚



F19 墓塚

図 8 調査状況と墓塚跡

4 可視領域から読み解く塹壕群の機能

各塹壕からの射撃可能範囲を推測するために、塹壕ごとの可視領域¹⁾を算出しました。

丘陵南端塹壕群（図9上） 南西側に可視領域が広がり、攻撃正面となる鶴山道や鶴山道南側尾根の西面には視界が効きません。攻撃正面と想定される鶴山道や鶴山道南側丘陵西面に視界が効かず、丘陵の南西部に可視領域が集中することから、これらの塹壕は、二股台場を大野川に沿って南側から迂回されることを阻止する機能を担ったと推測します。

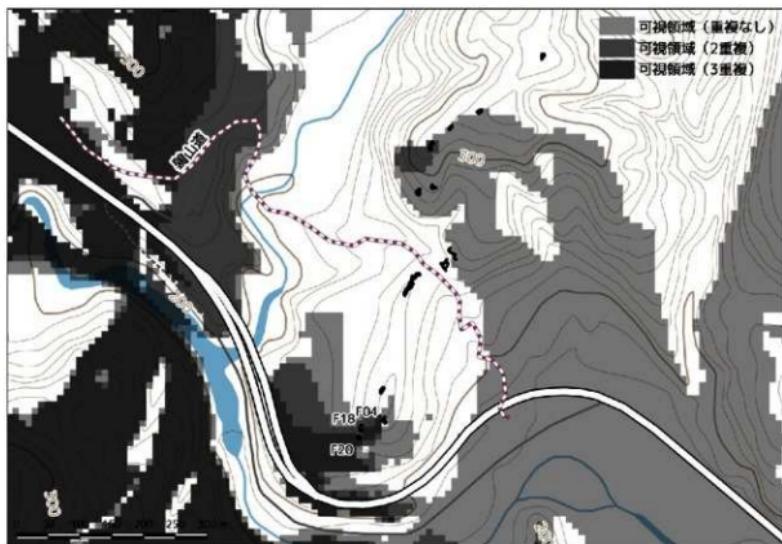
鶴山道南側塹壕群（図9下） 主な可視領域は鶴山道南側丘陵の西面緩斜面です。鶴山道にもわずかに視界が効きますが、300m以上離れており、精確な銃撃が可能な距離ではありません。現時点ではF03しか確認されていないため断定は避けなければなりませんが、二股沢川方向に広く視界が効き、一部鶴山道も可視領域に含まれることから、丘陵西面の緩斜面からの攻撃に備えることを主目的とし、鶴山道を側射する機能も併せもつと推測します。

鶴山道正面塹壕群（図10上） 3つの塹壕の可視領域が鶴山道上で重複することから、鶴山道を侵攻する敵を正面から封殺することがその主たる機能と推測します。また、鶴山道南側丘陵西面にも一部視界が効くことから、丘陵南側の西面を側射する機能もあったと考えられます。

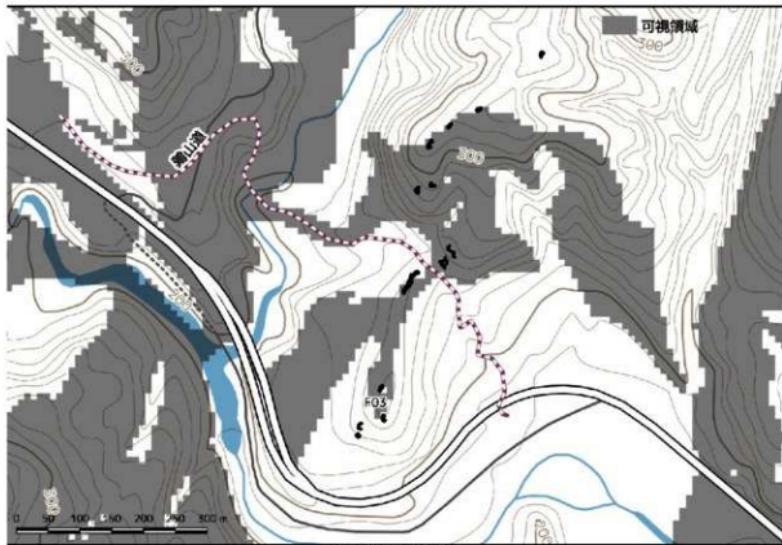
鶴山道北側低位塹壕群（図10下） 鶴山道及び鶴山道南側丘陵の西面に可視領域が広がります。鶴山道と鶴山道南側丘陵西面全域に視界が効くことから、鶴山道とその南側の西斜面に対して側射することが主な機能と推測します。

鶴山道高位塹壕群（図11） 鶴山道南側丘陵の一部に視界が効きますが、尾根頂部が中心となります。鶴山道にはほとんど視界が効かず、可視領域の大部分は二股沢川対岸に広がります。主戦場となる鶴山道や鶴山道南側丘陵西面には視界が効かず、主に二股沢川対岸に視界が効くことから、これらの塹壕群二股沢川対岸の新政府軍陣地での活動や北側からの迂回を監視・牽制することが主な機能と推測します。

1) 可視領域の算出にはGRASS GISの「r.viewshed」コマンドを利用し、基準地上高は1.75mとしました。

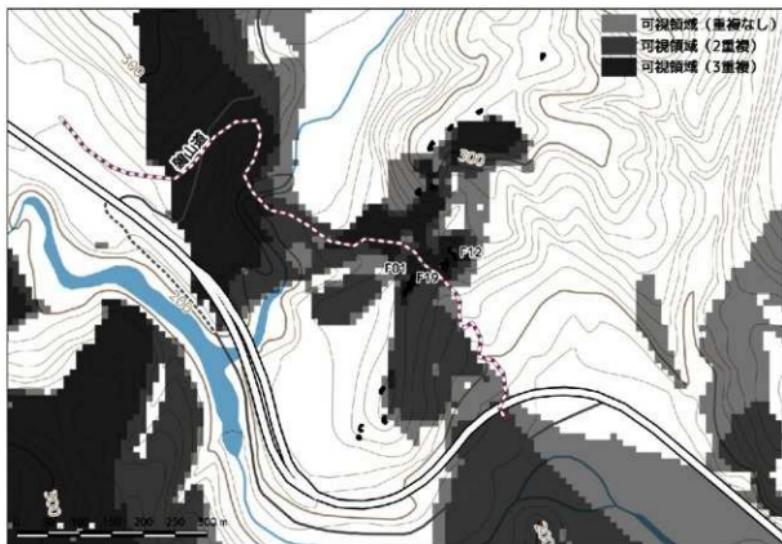


丘陵南端整壩群

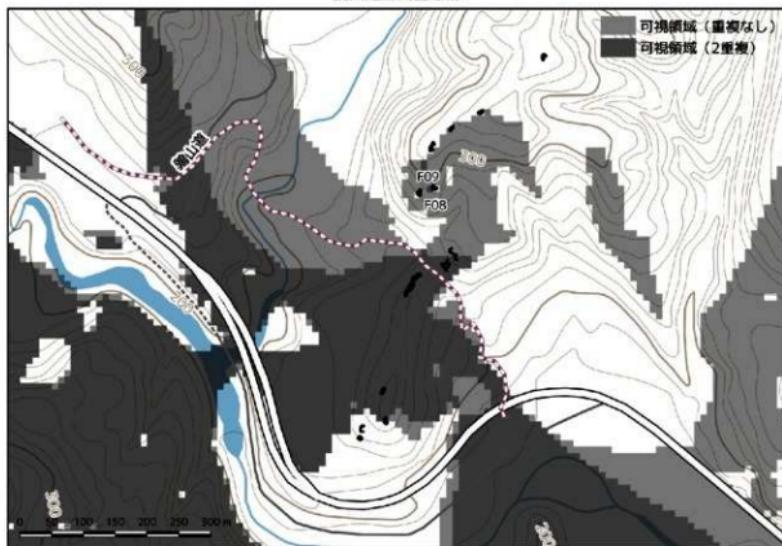


鶴山道南側整壩群

図 9 整壩群の可視領域（1）



鷺山道正面整壕群



鷺山道北側低位整壕群

図 10 整壕群の可視領域（2）

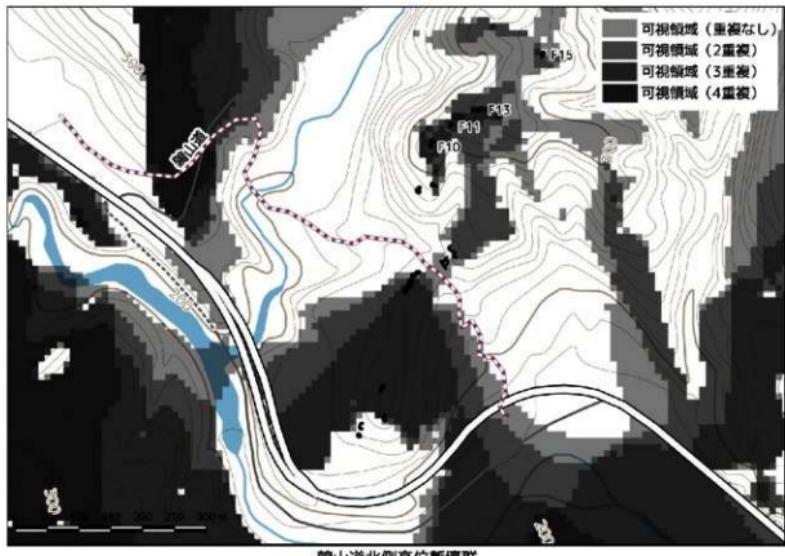


図 11 墓塚群の可視領域（3）

5 新政府軍塹壕

5.1 新政府軍塹壕（S01）の規模と形状

2021 年に二股川右岸の新政府軍陣地と考えられる地点で新たに塹壕を発見しました（S01）。S01 東側には旧道と思われる道跡があり、つづら折れに二股川へ下っています（図 13）。S01 はこの旧道に接した西側に位置する（図 14）。

S01 の塹壕は 2 本認められ、二股川に近い下位塹壕で長さ約 10m、二股川から遠い上位塹壕で長さ約 25m です（図 12）。塹壕の深さは深いところで約 1.8m です。

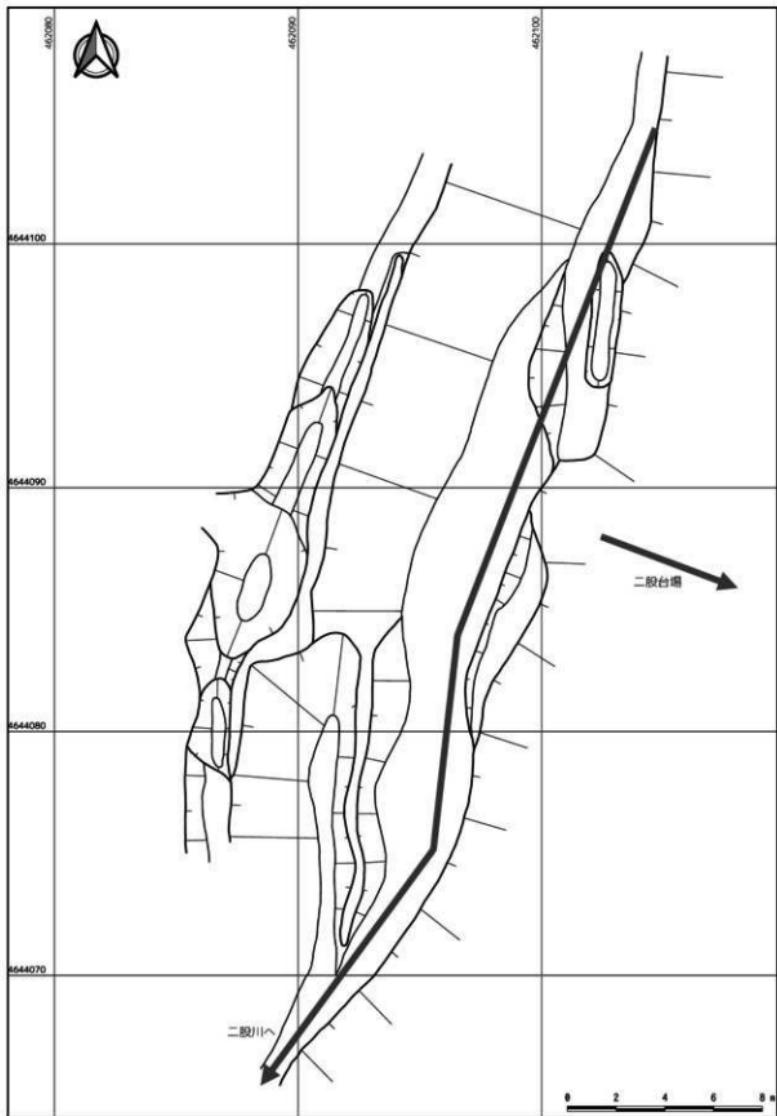


図 12 S01 平面図



図 13 S01 東側の通路（写真奥が二股川上流方向）



図 14 S01 上位斬壕全景（南から）

5.2 S01 の可視領域

S01 の可視領域は二股台場の斬壕群の所在する台場山尾根の大半を含み、ほぼすべての斬壕を視界に捉えることが可能です（図 15）。逆に言えば、S01 は二股台場のあらゆる斬壕から攻撃目標となり得る地点でもあります。特に鴉山道北側に位置する F08、F09、F10、F11 はいずれも平面距離で 300m 以内であることから、相互に脅威となる位置関係です。

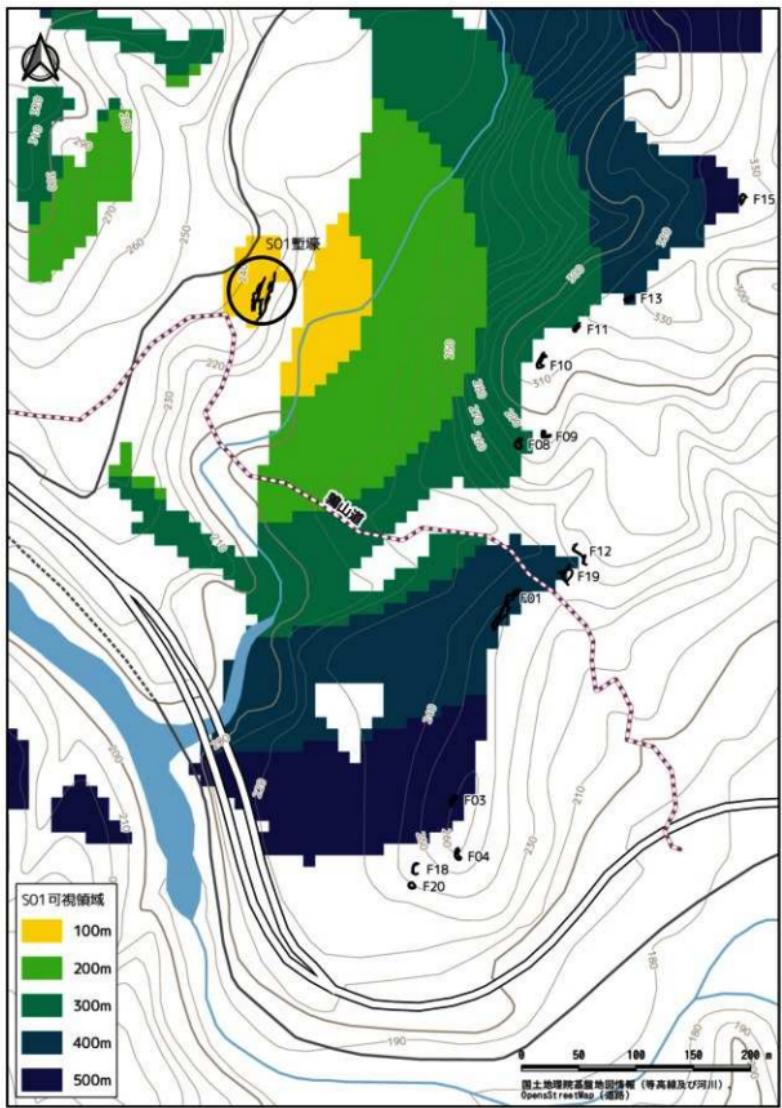


図 15 SO1 可視領域

5.3 考察

5.3.1 S01 の選地とその意味

二股川は両岸が切り立った崖となっており、とくに大野川に近い下流側は深い渓谷です。川底への降下、渡渉、対岸の崖上に上がるまでのいずれの行程も急傾斜の降下と登坂を余儀なくされます。一方、上流側は比較的緩やかであることから、渡渉地点は鶴山道より北側が選定された可能性が高いと考えられます。S01はこうした渡渉地点へ向かう通路を取り込む形で配置されています。無防備となる二股川渡渉に際して、一時的な退避場とすることや対岸の二股台場に対して牽制射撃を行うことがS01の役割と考えられます。



図 16 S01 から眺望する二股台場

次に、渡渉した部隊が強力な十字砲火によって孤立・殲滅することを防ぐため、二股台場に対抗して援護射撃を行い、二股台場側の目標を分散させる狙いもあったと推測します。S01は二股台場のほとんどすべての壘壕を射角に入れており、援護射撃によって二股台場側の攻撃をS01に引きつけることで、渡渉部隊に向けるべき二股台場側の火力の一部をS01に振り向けることを強要したと推測します。

6 二股台場の防衛構想

6.1 二股台場の立地

函館側からみた場合、二股台場は急峻な山道の開始地点にあたり、これより下流では大野川沿いに平坦地を通行することとなります。一方、江差側からみた場合、二股台場は長い山道の終端に位置することとなります。二股台場の立地は、旧幕府軍補給線の負担を軽減しつつ、新政府軍には最大限の負担を強いる地理的環境となります。

第一次会戦の後、新政府軍は厚沢部稲倉石まで撤退を余儀なくされますが、二股台場から稲倉石までは現在の国道227号を基準としても山中を14km以上の距離となります。旧幕府軍の補給拠点は市渡村（現

北斗市一渡）と考えられますが、約 10km の平坦地の補給線であり、両軍の補給格差は大きいものがありました。新政府側の記録にも「雨は降り非常な困難で、食料も来ない」、「度々稻倉市（「稻倉石」：執筆者註）まで休養の為に戻らなければならぬので不便でいけません」（児玉忠「函館役」）とあり、補給に困難を生じていたことが明らかです。

6.2 埋壕配置からみる旧幕府軍の防衛構想

二股台場は鶴山道とその南側尾根では傾斜が緩く、地形的には攻略が容易です。一方、鶴山道北側尾根の西面は、一部に岩肌が露出する 40 度以上の急傾斜となっています。このため、二股沢川方面から直接的に鶴山道北側尾根を攻略することは困難です。旧幕府軍は、この北側尾根に埋壕を配置し、防御正面となる鶴山道や鶴山道南側の緩斜面を側射できるようにしたと考えられます。鶴山道を封殺する鶴山道正面埋壕群を開口部とみた場合、その前面に張り出す北側尾根は「食い違い虎口」のような位置関係となっており、鶴山道正面埋壕群に接近する敵を、側面又は背面から攻撃することが可能となります。こうした、自然地形の活用が二股台場を構成する重要な要素となったといえます。

一方、鶴山道南側では二股沢川河岸から尾根の麓までは幅約 100m の平坦地が広がります。一見たやすく侵攻できそうですが、尾根上の埋壕群や鶴山道北側埋壕群からの十字砲火を受ける火制帯となっています。旧幕府軍は二股沢川河岸にも埋壕を設けていたようですが、河岸を阻止線とはせず、主陣地を尾根上に設け、二股河岸から尾根までの平坦地を陣前地として火力の集中が可能となる埋壕配置を実現しました。これにより、新政府軍は開平地での長距離突撃を強いられる結果になったと解釈できます。地形的に攻略の容易な鶴山道南側の尾根に向かった新政府軍に対して、鶴山道南側埋壕群や鶴山道正面埋壕群からの正面射撃と鶴山道北側埋壕群からの側面射撃が組み合わされ、新政府軍は遮るものない平坦地で十字砲火を浴びることになったと推測されます（図 17）。

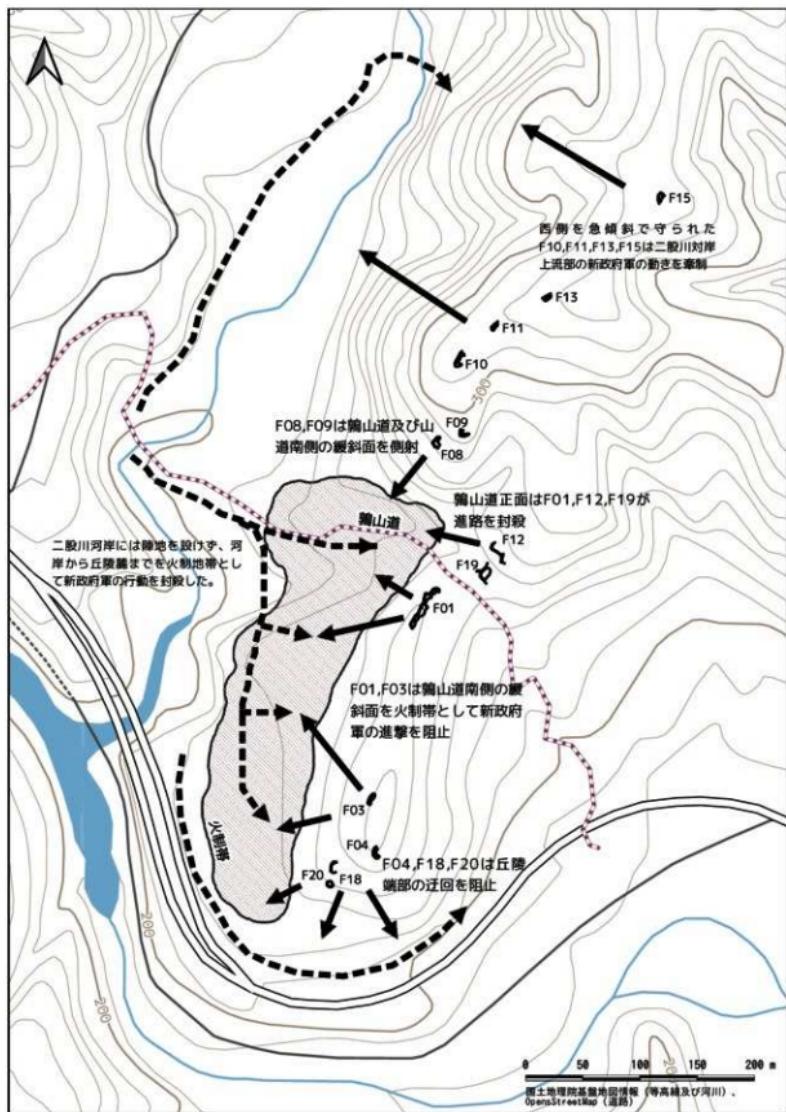


図 17 二股台場戦闘模式図

6.3 新政府軍塹壕の意義

二股台場では施条銃の性質を活かし、渡渉した新政府軍部隊を段丘上の平坦面で効果的に制圧する防御戦を構想していたことはすでに指摘したとおりです（石井ほか 2020）。一方、新政府軍においても、一方的な集中砲火を軽減するために、二股川対岸や側面から牽制射撃を繰り返したものと考えられます²⁾。

本調査で確認した二股川西岸の S01 は、新政府軍が二股川を渡渉する部隊を援護するとともに、二股川東岸に着岸した新政府軍部隊に集中する銃撃を緩和するため、あえて二股台場の各塹壕の射角内に構築し、自らが攻撃目標となることで二股台場の目標を分散させる意図があったと読み解きました。

6.4 結論

二股台場をめぐる攻防戦では小銃が主兵器として用いられました。旧幕府軍ではミニエー銃弾を使用する前装式施条銃、新政府軍ではこれに加えて後装式施条銃が用いられました。これらの施条銃の銃撃開始距離は「300 メートル弱から 500 メートルくらい」とされ（保谷 2007: 215）、滑腔銃に比較して、射程距離と命中精度が大幅に向上し、散開戦闘が歩兵部隊の基礎的な戦術様式となりました（保谷 2013）。二股台場の攻防は、明治元年の戦争を通して施条銃を用いた戦闘を経験し、戦闘技術を蓄積した部隊同士の戦闘です。防御側の旧幕府軍は、尾根上に塹壕を散在させ、それらを組み合わせることで、攻略がたやすく見える鴫山道南側の平坦地を火制地帯としたと判断されます。一方、新政府軍でも二股台場の脅威を緩和すべく、二股川対岸に塹壕を構築し、塹壕戦を挑んでいたことが明らかになりました。

これらの塹壕群は当初の作戦構想として準備構築されたものと、戦闘経過における包囲と内旋のプロセスとして構築されたものがあると考えられます。今回の調査では、そのような経時的なプロセスを復元することはできませんでしたが、施条銃の特性を生かした陣地構築を、正面防御と側面射撃を塹壕群の組み合わせによって実現しようとした築城主体の意図と防衛戦略を読み解くことができました。

7 終わりに

7.1 本報告について

1. 本報告は、2017 年から 2021 年にかけておこなった北斗市二股台場の測量調査成果で、『北海道考古学 第 56 輯』（北海道考古学会 2020）掲載の「北斗市二股台場の測量調査—箱館戦争戦跡の考古学的調査一」のプレプリントを基礎として作成しています。
 2. 本調査結果については、LocalWiki にリージョン「北斗市二股台場」(<https://ja.localwiki.org/futamata/>) を開設し、調査状況や遺構配置図、関連資料についてリアルタイムで公開しました。
 3. 調査に関する写真、図面、GIS データは GitHub (<https://github.com/IshiiJunpei/Futamata>) で管理・公開しています。
 4. 本書掲載文章及び写真等の一切はクリエイティブ・コモンズライセンス 4.0 表示のライセンスで公開します。クレジットは（©2022 箱館戦争戦跡プロジェクト）としてください。
 5. 調査対象地である北斗市台場山周辺は、遊歩道の整備も十分ではなく、ヒグマ出没地域であることから、入林には細心の注意をはらうようお願いします。
- 2) 『函館戦記』（大野右仲）では二股川の下流を回り込み、側面から二股台場を攻撃しようとした新政府軍が下流側にも旧幕府軍の備え（塹壕の配置）があったことを知り驚く記述がある。正面から突破が困難な二股台場に対して、側面からの攻撃により新政府軍正面への脅威を緩和しようと試みていたことがわかる。

7.2 謝辞

筆者らの調査成果は、函館市在住毛利剛氏の踏査成果を借りて実現しました。毛利氏は塹壕の図化とともに、GPSで取得した位置情報を公開しています。これらの情報を頼りに筆者らは円滑に調査を進めることができました。毛利氏の丹念なフィールドワークと適切な記録の公開に敬意と感謝の意を表するとともに、学術調査の手本として引き継いでいきたいと考えています。

引用文献

- 石井淳平・野村祐一・塙田直哉・時田太一郎 2020 「北斗市二股台場の測量調査—箱館戦争戦跡の考古学的調査—」『北海道考古学』第 56 輯, pp. 35-54
維新戦歿者五十年祭事務所編 1917 『維新戦役実録談』 維新戦歿者五十年祭事務所
大島圭介・今井信郎編著 1998 『南柯紀行・北国戦争概略衝鉢隊之記』 新人物往来社
大塚武松編 1932-1933 『薩藩出軍戦状』 第二 日本書籍協会
河野常吉 1924 『北海道史蹟名勝天然記念物調査』 北海道立図書館所蔵, 1974 年復刻版 『北海道史蹟名勝天然記念物調査』 名著出版, pp. 88-91
新人物往来社編 1995 『新選組史料集』 新人物往来社
須藤隆仙編 1996 『箱館戦争史料集』 新人物往来社
太政官編 1929 『復古記』 第 14 冊 内外書籍
保谷徹 2007 『戊辰戦争（戦争の日本史）』 18 吉川弘文館
保谷徹 2013 「施条銃段階の軍事技術と戊辰戦争」 箱石大編『戊辰戦争の史料学』 勉誠出版, pp. 61-87
松前町史編集室 1974 「戦争御届出書」『松前町史（史料編）』第 1 卷 松前町, pp. 317-343
毛利 剛 2012 『二股口台場』 自遊出版工房

第Ⅱ部

情報交換 2

渡島・檜山地域の発掘調査

はこだてし でんでんこうしゃがっしゃくしゃいせき
函館市 電電公社合宿舎遺跡 (登載番号 B-01-295)

所 在 地：函館市白尻町337-1

発 売 原 因：白尻漁港臨港道路建設工事

発 売 面 積：412 m²

発 売 期 間：令和4年5月9日～令和4年6月22日

調 査 主 体：函館市教育委員会

調 査 実 施：一般財団法人 道南歴史文化振興財團

担 当 者：函館市教育委員会 吉田 力、小林 貢

調 査 者：(一財)道南歴史文化振興財團 黒沢 健明 (調査担当者)

調査の概要

遺跡は、昭和51年に南茅部電報電話局合宿舎建設に伴い発見された。函館市南茅部地域では平成26年度より白尻漁港臨港道路建設に伴う発掘調査を行っており、本遺跡は平成27年度から調査を開始して今年度で6回目、計5,102 m²の発掘調査を行っている。今年度調査区は本遺跡の西端にあたり、白尻漁港西隣へと注ぐ無名小河川を西側に見下ろす標高約34～38mの海岸段丘上緩傾斜地に位置し、小河川との比高差は6m程度を測る。無名小河川を挟んだ西側には白尻小学校遺跡、北側には白尻B遺跡が所在している。

Ⅲ層調査

Ⅲ層の調査で検出した遺構は、土坑7基、焼土2ヵ所である。その他に調査区北端において掘上土の厚い堆積がみられたが、調査区内では元になる遺構は確認されていない。

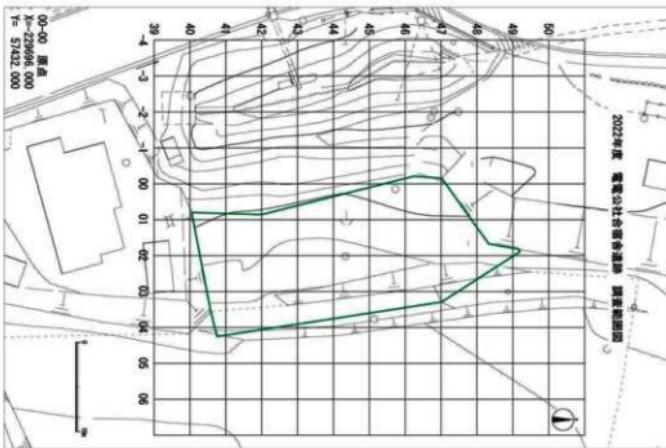
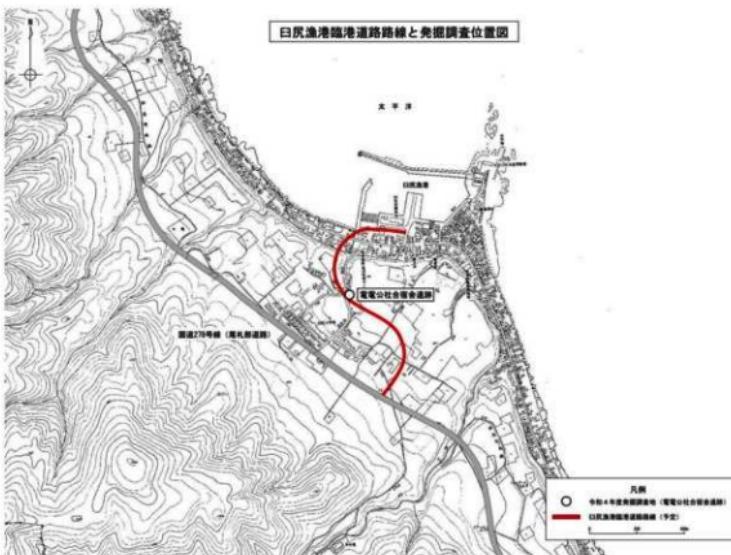
土器は縄文中期から後期にかけての時期のものが出土しているが、主体となるのは中期のサイベズVI式である。石器類はスクレイパー、石斧、擦石や石皿などが出土しており、遺物点数の割に北海道式石冠や扁平打製石器といった擦石類の出土が多くみられるという特徴がある。遺物総数は約1,000点である。

これまで南東側で行ってきた調査では縄文時代後期初頭～前葉が主体であったが、今年度調査区では中期前半が主体へと移り変わっている。

Ⅴ層調査

V層の調査で検出した遺構は土坑6基、柱穴状土坑3基である。

土器は中茶路式や東釧路IV式が出土しており、中茶路式が主体となる。石器は石槍、スクレイパー、石錘、擦石、砥石などが出土している。遺物総数は約1,000点である。





III層完掘状況（南から）



V層完掘状況（南から）

はこだてし うすじりしょうがうこういせき
函館市 白尻小学校遺跡 (登載番号 B-01-257)

所 在 地：函館市白尻町340-5

発 売 原 因：白尻漁港臨港道路建設工事

発 売 面 積：490m²

発 売 期 間：令和4年6月23日～令和4年9月16日

調 査 主 体：函館市教育委員会

調 査 実 施：一般財団法人 道南歴史文化振興財団

担 当 者：函館市教育委員会 吉田 力、小林 貢

調 査 者：(一財)道南歴史文化振興財団 黒沢 健明 (調査担当者)

調査の概要

遺跡は、函館市白尻町に所在する白尻漁港西隣へと注ぐ無名小河川の上流、海岸線からの直線距離約300m、標高約30～35mの小河川左岸の海岸段丘上緩傾斜地に位置している。昭和44年に白尻小学校改築中にストーンサークルが発見・調査された場所は本調査区から約200m離れた標高約50mの元白尻小学校校舎のある地点で、そのさらに裏手の国道278号の通る標高約60～70mの地点が平成16・17・19年に調査されている。今年度調査区は昨年度調査区から市道白尻小学校1号線を挟んだ北側に位置し、令和元年度に調査された白尻B遺跡とは旧沢を挟んだ南側に本調査区が位置する。白尻漁港臨港道路工事に伴う調査では2年間で1,583m²を調査されたことになり、来年度も市道白尻小学校1号線直下の範囲を調査する予定である。

Ⅲ層調査

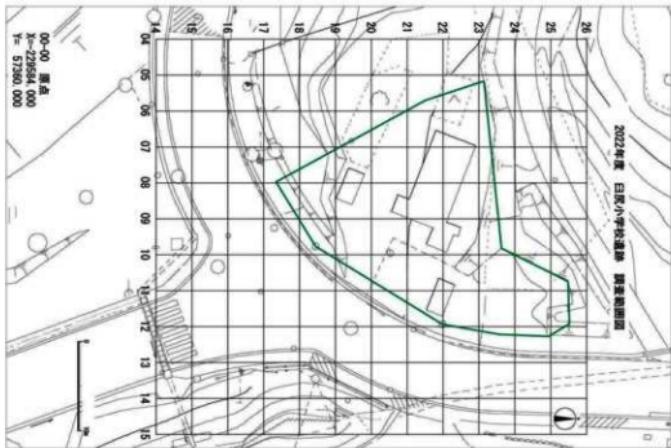
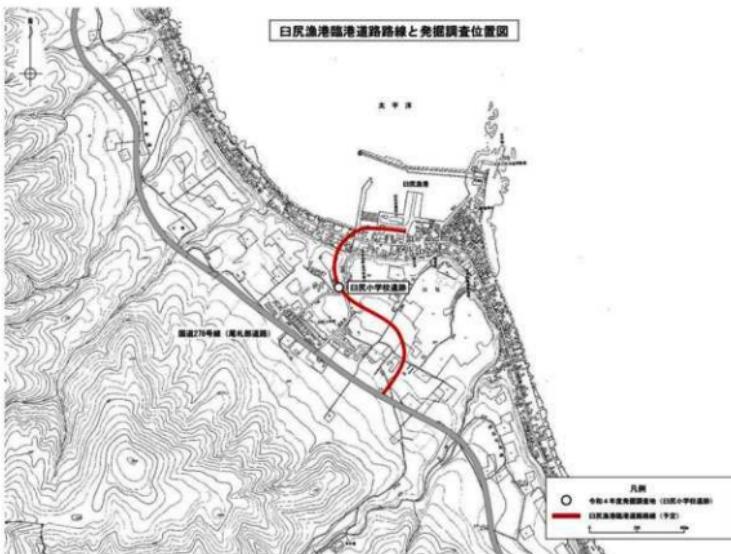
検出した遺構は、竪穴建物跡3軒、土坑21基、焼土6ヵ所、屋外炉2基、埋設土器2基、剥片集中1ヵ所、立石1基である。竪穴建物跡は後期中葉が1軒、晩期中葉が2軒である。晩期の竪穴建物跡2軒はほぼ同じ位置に重なり、古い下層の竪穴建物は周溝の数から2回拡張されていると思われ、炉の周辺に礫の抜け跡と思われる堆みがあることから本来は石囲炉であった可能性がある。上層の竪穴建物は下層の竪穴建物に覆土が若干堆積した後に構築され、炉は石囲炉内に土器の口縁部を埋めた炉となっているが、その後の覆土内に構築された屋外炉によって炉石は一部抜き取られているとみられる。この屋外炉も炉石内に土器を埋設している。これらの竪穴建物2軒と屋外炉1基が晩期の遺構と確実に判断できるものである。後期中葉の竪穴建物跡も近接して構築されており、一部晩期の竪穴建物跡と重複している。竪穴外の近接した位置の包含層中から完形の注口土器が出土しており、掘り方は確認できなかったが埋設されていた可能性もある。この他、埋設土器の1基と共に後期中葉の鰐淵式の時期に属すると判断できる遺構である。他に、埋設土器の1基が円筒下層式であるが、円筒下層式土器の出土数は極めて少なく、当該期の遺構も極めて少ないものと思われる。

遺物は土器が縄文後期（鰐淵式）、晩期（大洞C2式古段階）が主体的に出土しており、昨年度同様の傾向であった。石器類は石鏃、スクレイパー、石斧、擦石、磨石などが出土している。遺物総数は約6,000点である。

Ⅴ層調査

検出した遺構は竪穴状遺構1基、土坑1基、焼土4ヵ所である。竪穴状遺構は浅い沢地形の始まる最上流部で、竪穴状に急に落ち込み、床面にあたる部分が平坦であるため竪穴状遺構とした。床面からは石錘が出土している。覆土は自然堆積とみられるが、この覆土中からは重層的に形成された広い焼土面を確認している。

土器はノダップI式や東鉗路IV式が出土している。石器は石鏃、スクレイパー、石斧、石錘、擦石などが出土している。遺物総数は約1,500点である。





III層完掘状況（右が北）



V層完掘状況（右が北）

はこだてし うすじりえーいせき
函館市 白尻A遺跡 (登載番号 B-01-237)

所 在 地：函館市白尻町357-2

発 売 原 因：白尻漁港臨港道路建設工事

発 売 面 積：392m²

発 売 期 間：令和4年9月20日～令和4年11月30日

調 査 主 体：函館市教育委員会

調 査 実 施：一般財団法人 道南歴史文化振興財団

担 当 者：函館市教育委員会 吉田 力、小林 貢

調 査 者：(一財)道南歴史文化振興財団 黒沢 健明 (調査担当者)

調査の概要

函館市南茅部地域では平成26年度より白尻漁港臨港道路建設に伴う発掘調査を行っており、本遺跡は平成26年度から調査を開始して今年度で3回目、計3,059m²の発掘調査を行っている。遺跡は、昭和44年の白尻小学校遺跡の発掘調査がきっかけで発見され、その後、昭和54年に白尻共同墓地線改良工事に伴う範囲確認調査によって127,000m²に及ぶことが確認された。今年度調査区は白尻町の弁天岬に面した標高約40m、海岸線からの距離約400mの海岸段丘上に位置し、平成26・30年の調査区に挟まれた白尻高台1号線の道路下にある。調査は区域内の支障物が調査開始までに撤去できなかったことから調査区を分割して進めた。

Ⅲ層調査

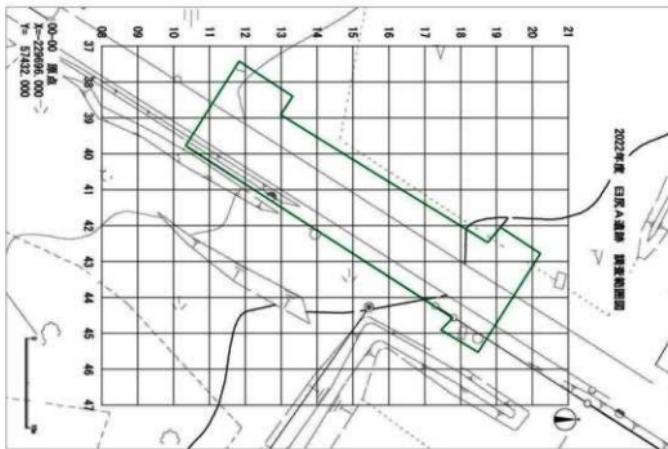
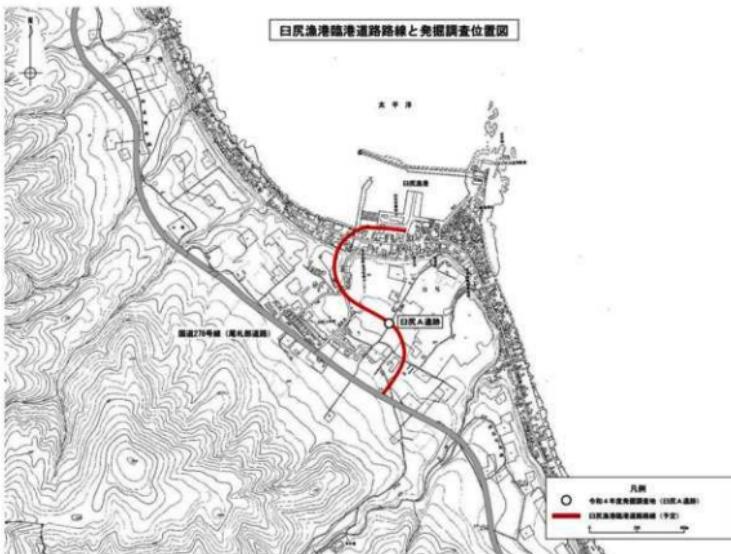
検出した遺構は、竪穴建物跡1軒、土坑30基、柱穴状土坑26基、落し穴1基である。竪穴建物跡は平成30年度に確認したものの続きで、一部調査区外へと続いているが、全体の4分の3程を確認したことになる。時期は涌元式とみられ、円形ないし梢円形のプランで主柱穴は比較的細みな3本、石圓炉が中央に位置し、炉の直下には深めの掘り込みがある。前回調査で炉石に再利用された痕跡があったが、炉石下を掘り下げたところ礫の抜け跡が確認され、石圓炉を一度作り変えていると考えられる。柱穴状土坑のうち掘立柱建物跡と考えられるプランを3軒確認でき、それぞれ長方形6本柱、正方形4本柱、六角形6本柱と異なる。平成26年度調査時の2軒とあわせてこれまで5軒確認されたことになり、北西側から弧を描いて6本柱（長方）、4本柱（正方）、6本柱（長方）、4本柱（正方）、6本柱（六角）と並ぶ。北東側の調査区外にも続く可能性があり、石倉貝塚などのように環状になる可能性も考えられ、その場合少なくとも直径40mとなる。これまで確認された竪穴建物跡4軒も同様の規模で弧を描いて並んでいるが、掘立柱建物跡の並びとは中心軸が少しずれているようで一部交差するような並びとなり、竪穴建物跡と掘立柱建物跡は同一時期ではないとも考えられる。

土器は縄文中期（サイベ沢VI式）、後期（涌元式、トリサキ式、大津式）が出土している。主体となるのは後期初頭の涌元式である。石器は石鎌、スクレイバー、擦石、石錘、石皿などが出土し、線刻のある石製品もみられた。他にベンガラ塊も確認されている。遺物総数は約1,500点である。

Ⅴ層調査

検出した遺構は土坑5基、柱穴状土坑3基、焼土1カ所である。

土器は小破片のみで東鉄路IV式が出土している。石器は石鎌、スクレイバー、擦石などが出土している。遺物総数は約100点である。





1区Ⅲ層完掘状況（上が北）



2区Ⅲ層完掘状況（上が北）

はこだてしおおふねじーいせき
函館市大船 G 遺跡 (登載番号 B-01-302)

調査理由：開発事業（道路）

調査地：函館市大船町533-5ほか

調査主体：函館市教育委員会（調査担当者 吉田 力、小林 貢）

調査実施：一般財団法人 道南歴史文化振興財団（調査担当者 萩野幸男）

調査期間：令和4年5月10日～令和4年9月2日

調査面積：2,890m²（III層）、964m²（V層）

調査の概要

遺跡は、函館市南茅部地域の大船川から北西へ約500mの位置にある木田川の左岸海岸段丘上に位置する。調査区は標高約45～62mの東緩斜面となっており、南西側には湧水地点が2ヵ所みられた。調査区南側の木田川右岸には大船I遺跡や大船H遺跡が位置している。調査区北側は比高差約10mの沢となっており、この沢の北西約100mの同じ段丘上には大船E遺跡が位置する。遺跡の西側は背後の丘陵へやや急傾斜で続き、南東は史跡大船遺跡が広がる緩斜面が400mほど続いた後、急傾斜をなし更に100mほどで海岸に至る。

本遺跡は、令和元年（2019年）に遺構や遺物の状況を把握する目的で調査区全体を格子状に区切ったうち飛び石状におよそ25%の面積（964m²）についてIII層（縄文時代前期～統縄文時代の遺物包含層）調査を実施し、約2,500点の遺物が出土していた。調査面積3,854m²のうち、今回は未調査となっていたIII層2,890m²と、調査区南側のV層（縄文時代早期遺物包含層）964m²について調査を行った。なお、III層は調査区南側を1期、北側を2期として分割し調査を実施した。

遺構と遺物

III層調査 III層の遺構は、竪穴建物跡19軒、土坑52基、柱穴状土坑48基、石器埋納遺構1基、焼土4ヵ所、剥片集中1ヵ所を検出した。竪穴建物跡は重複して構築されるものが多く、4軒が重複した1例と3軒が重複した2例を確認した。埋甕炉をもつ竪穴が6軒、石囲炉が2軒あった。竪穴の構築時期は縄文時代中期後葉（榎林式期、大安在B式期）と後期初頭（天祐寺式期、涌元式期）である。土坑は竪穴周辺に分布するものが多く、一部にラスコ状のものもみられた。また、土坑の大半は自然堆積で一部に人為堆積と考えられるものもみられたが、墓と断定できるものは確認できなかった。柱穴状土坑は一部で列状の配置がみられた。石器埋納遺構は中期後葉の竪穴壁際上部で検出したもので、尖頭器、スクレイパー、箇状石器など7点（長軸約11～20cm）がローム質土を挟んで重なり合うように出土した。明確な掘り込みは確認できなかつたものの、大型の石器を含む一括品と捉えられる。石質は珪質頁岩と輝石安山岩がある。

遺物は、縄文時代中期～晩期、統縄文時代の土器を確認した。石器類では、石鏃、スクレイパー、石斧、擦石、石皿などが出土した。この他、赤彩壺形土器や漏斗状土製品など、約8,000点が出土した。

V層調査 遺構は検出されなかつた。遺物は、早期中葉と考えられる貝殻文や無文の土器、石鏃、スクレイパー、石斧など約100点が出土した。

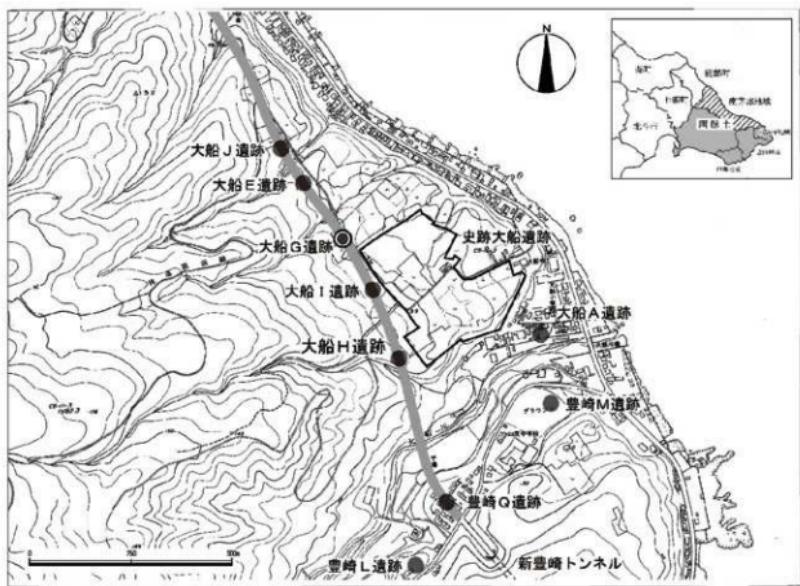


図 1 遺跡の位置と周辺の遺跡

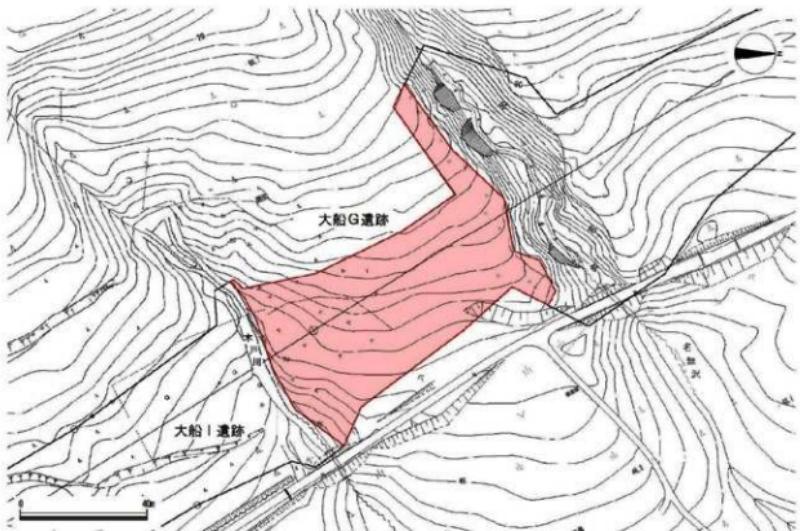


図 2 調査区の位置と周辺の地形



調査区全景（南東から）



1期III層完掘（南東から）



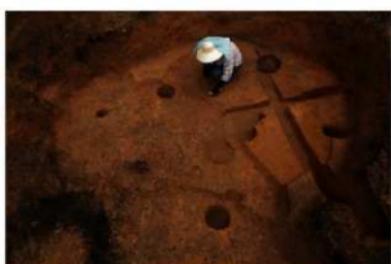
2期III層調査状況（北から）



2期III層完掘（北西から）



堅穴建物跡 PD-5・6 完掘（東から）



PD-7 完掘（東から）



PD-5 埋甕炉断面



PD-6 埋甕炉断面



PD-9 完掘（北から）



PD-9 石囲炉、石囲炉下の埋甕炉検出



PD-9 覆土土器出土状況（後期初頭）



PD-9 床面直上土器出土状況（後期初頭）



PD-16 完掘（南西から）



PD-16 埋甕炉断面



PD-16 貼床下検出ピット土層断面



PD-16 床面漏斗状土製品出土状況



P D - 12 完掘（北東から）



P D - 12 土層断面



土坑P - 7 土層断面



P - 7 坑底直上土器（後期）出土状況



P - 25 土層断面



P - 35・36 土層断面



柱穴状土坑P H - 21 検出面上土器（晩期）



P H - 28 土層断面



石器埋納遺構出土狀況



石器埋納遺構出土石器



剥片集中 1 出土狀況



III層赤彩壺形土器（後期）出土狀況



V層完掘（南東から）



V層土器（早期）出土狀況



V層石鏟出土狀況



V層石斧出土狀況

はこだてしおおみねいーいせき 函館市大船E遺跡 (登載番号 B-01-303)

調査理由：開発事業（道路）

調査地：函館市大船町513-1

調査主体：函館市教育委員会（調査担当者 吉田 力、小林 貢）

調査実施：一般財団法人 道南歴史文化振興財団（調査担当者 萩野幸男）

調査期間：令和4年9月5日～令和4年11月25日

調査面積：1,630m² (III層), 1,630m² (V層)

調査の概要

遺跡は函館市南茅部地域の大船川から北西へ約600mと約800mの位置にある小さな沢に挟まれた、海岸段丘上に位置する。調査区の標高は約53～60mである（図2）。遺跡の東側は200mほど緩斜面が続いた後、急傾斜をなし更に50mほどで海岸に至る。西側は背後の丘陵へ続き、約3.5kmで泣面山（標高835m）へと繋がっている。遺跡の北側には沢を挟んで大船J遺跡、南東の同じ段丘上にはそれぞれ小さな河川や沢を挟んで大船G遺跡、大船I遺跡、大船H遺跡、史跡大船遺跡が位置している（図1）。

調査は、縄文時代前期～統縄文時代の遺物包含層であるIII層と、IV層（駒ヶ岳f・g火山灰）下位の縄文時代早期遺物包含層であるV層について行った。

遺構と遺物

III層調査 III層の遺構は、竪穴建物跡7軒、土坑墓1基、土坑6基、柱穴状土坑13基、埋設土器1基、焼土5ヵ所、剥片集中1ヵ所、炭化物集中1ヵ所を検出した。竪穴建物のうち新旧の2軒が重なりあっているものと、これらの竪穴構築時の掘り上げ土で埋まつたと考えられる竪穴建物跡を1軒確認した。1軒の床面からは三角形岩板が出土している。建物跡の特徴や周辺の出土土器から3軒は縄文時代中期の構築と推測している。また、竪穴覆土を掘り込んだ土坑1基と縄文中期前葉の埋設土器1基を検出している。他の4軒は竪穴の内外から出土した土器の特徴から後期前葉と考えられ、石窯炉や地床炉に接した床面に立石をもつものも2軒みられた。後期前葉の竪穴に隣接し、土坑墓を1基確認した。直径約1mの円形で、坑底付近から「カニのハサミ」を模したような沈線文が施された後期前葉の小型土器が出土した。副葬品と考えられる。また、竪穴の周辺に径2mほどの範囲で炭化物の広がりがみられ、後期前葉の土器や石器とともに炭化したクリ子葉を60個ほど検出した。焼土や剥片集中は、II層火山灰（ko-d, B-Tm）の直下で検出されたものが多く、統縄文時代の遺構と推測している。

遺物は、縄文時代中期～晩期、統縄文時代の土器を確認した。主体は後期前葉（大津式期）である。石器類では、石鏃、スクレイパー、石斧、擦石、石皿などが出土した。この他、スタンプ型土製品や三角形岩板など、約2,500点が出土した。

V層調査 V層の遺構は、土坑2基、柱穴状土坑3基を検出した。遺物は、貝殻文・沈線文・爪型文・絡条体圧痕文が施された早期中葉の尖底土器、スクレイパーや石錘、石皿など約90点が出土した。

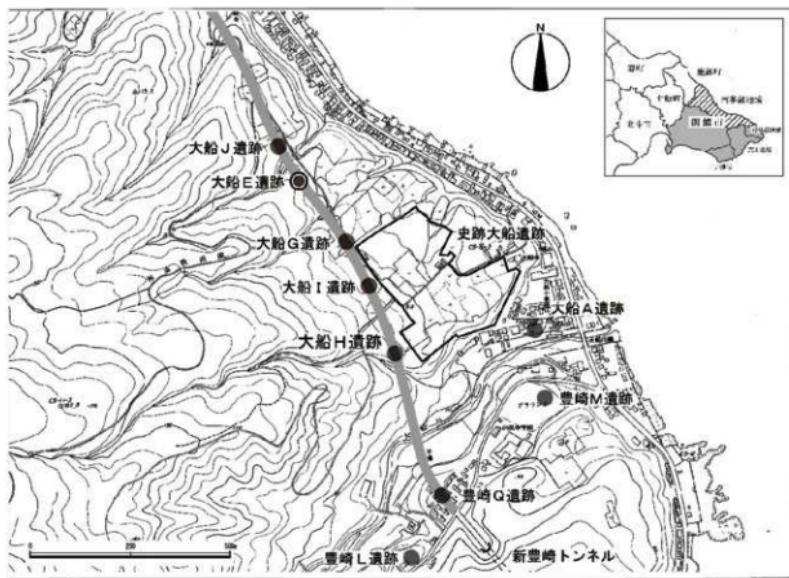


図 1 遺跡の位置と周辺の遺跡



図 2 調査区の位置と周辺の地形



調査開始前遺跡全景（南東から）



III層調査状況（北東から）



竪穴建物跡PD-1 完掘（北西から）



PD-1 床面出土三角形岩板



PD-4 完掘（中央はP-1）



PD-5 完掘（南から）



PD-6 完掘（南から）



PD-6 床面直上土器（後期前葉）出土状況



土坑墓G P - 1 土層断面（南から）



G P - 1 坑底直上土器（後期前葉）出土状況



埋設土器U P - 1 土器（中期前葉）出土状況



一括土器（後期前葉）出土状況



炭化物集中 1 クリ子葉出土状況



V層完掘（南東から）



V層土器（早期）出土状況（口縁部）



V層土器（早期）出土状況（底部）

令和3年度 サイベ沢遺跡発掘調査の概要

1. 発掘調査業務要項

事業名 函館市サイベ沢遺跡発掘調査業務

管理監督 函館市教育委員会

作業機関 株式会社シン技術コンサル

作業期間 令和4年3月1日～令和4年3月28日

調査面積 142 m²

調査地 函館市桔梗町32-5-10

調査原因 北海道渡島総合振興局が実施する常盤川総合流域防災工事

2. 調査結果概要

(1) 検出遺構

竪穴建物跡 2軒

土坑 13基

落し穴 1基

焼土 2カ所

(2) 出土遺物

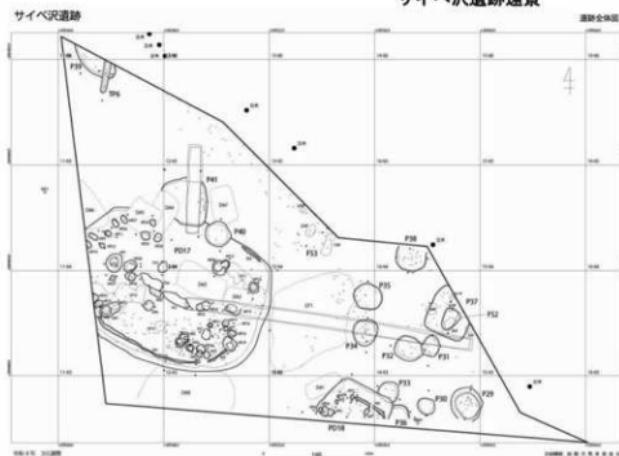
縄文土器 3,841点

土製品 5点

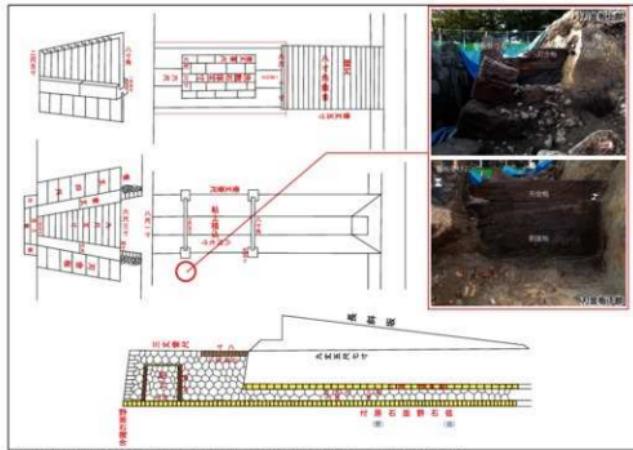
石器類 381点



サイベ沢遺跡遠景



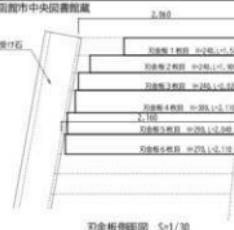
サイベ沢遺跡全体図



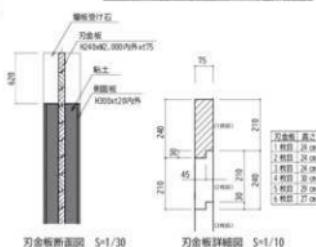
馬出堀洗堰渠水抜理構造図（「五稜郭新築年月取調書」所収）から書き下し。函南市中央図書館蔵

特別史跡五稜郭跡
堀排水口部石垣保存修理工事で
確認された刃金板の遺構

函館市教育委員会



刃金板側面図 S=1/30



森町 鷺ノ木遺跡 (B-14-35)

片山 弘喜

調査理由 史跡整備

調査地 茅部郡森町字鷺ノ木町 495-12 のうち

調査主体 森町教育委員会

調査期間 令和 4 年 6 月 6 日～11 月 22 日

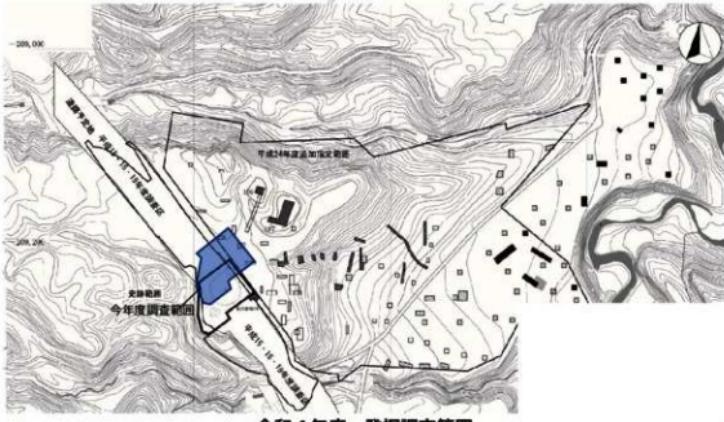
調査面積 97.26m²

(1) 鷺ノ木遺跡の概要

鷺ノ木遺跡は森町市街地の西方約 4 km、海岸線から直線距離で約 1 km 内陸の河岸段丘に位置する。桂川支流の上毛無沢と下毛無沢川に挟まれた標高 67～73 m の舌状台地（高位段丘面）と、桂川とその支流（上毛無沢川と下毛無沢川）に面した標高 37～50 m 前後の緩斜面（低位段丘面）、高位段丘面と低位段丘面を繋ぐ比高差約 15 m の斜面で構成される。

遺跡は平成 15 年の北海道縦貫自動車道建設に伴う緊急調査により縄文後期前葉の環状列石と竪穴墓域が発見され、平成 16 年と 19 年に緊急調査を実施している。また、遺跡の範囲内容確認を目的として平成 18～22 年および 24～28 年に高位段丘縁辺部と低位段丘面、緩斜面の発掘調査が行われている。高速道路にかかる環状列石と竪穴墓域がある 2720.5m² の範囲は平成 18 年に国の史跡に指定され、その後の調査で東側に広がりを見せることが判明したことから平成 24 年に 80136.37m² が追加指定された。

高位段丘面からは環状列石、竪穴墓域、配石 2 基、竪穴住居址 1 基検出されている。低位段丘面では上毛無沢川に面する縁辺部から縄文後期前葉の遺物が大量に出土して



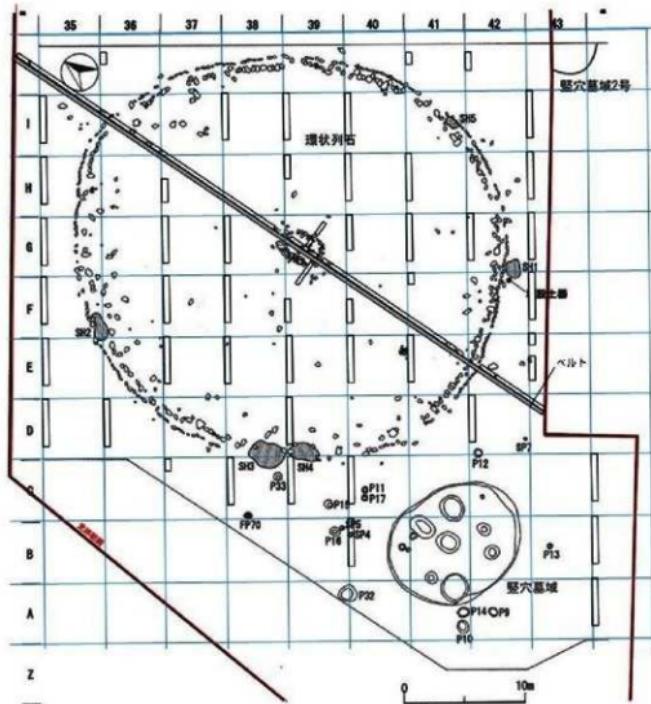
令和 4 年度 発掘調査範囲

いる。

(2) 今年度調査の概要

今年度は、史跡整備を目的として環状列石および周辺域での遺構の有無を確認するため、中央配石と周辺域にトレントを設定した。周辺域では平成15年に設定した調査区を利用したトレント（最大幅0.5×4m）を47箇所設置した。トレントは全体を基本層VI層（Ko-g層）上面まで掘り下げ、遺構面が検出されなかったトレントに関しては一部にサブトレントを設定し、層序の確認のためⅢ層（ローム層）まで掘削した。

遺構は竪穴状を呈する遺構が1基と土坑3基が確認された。竪穴状の遺構はトレント（G35）にて検出された遺構である。立ち上がりは擾乱をうけており明確ではない



令和4年度調査区配置図

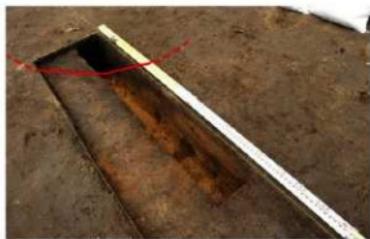
が、トレンチ東壁を除いてVI層とVII層が見られないことや、V層を由来する黒色土がブロック状に混じる黒褐色土の落ち込みが見られたこと、VIII層中での床面の検出から遺構と判断した。近接するトレンチでは遺構面を確認できなったことや、トレンチ周辺の精査による平面プランの確認から長径は4mほどになるものと想定される。今回の調査で遺構の性格を特定することはできていない。



豊穴状遺構（G35）セクション



豊穴状遺構（G35）検出状況



土坑（F37）検出状況



土坑（E41）検出状況



土坑（E43）検出状況

(3) 中央配石の調査

中央配石の構造を調べるため、石への影響が少ない地点に最大幅 0.3 m でトレンチを設定した。ベルトを挟んで西側では、配石の直下に深さ約 0.5m の掘り込みと、掘り込みの下部より円礫が検出された。東側では、土坑覆土と想定される土層が複数確認された。覆土はトレンチ外まで広がりを見せており、中央配石下部にある土坑の規模、性格の特定には至っていない。遺物は、土器が 7 点と石器が 2 点出土した。土器はいずれも時期の特定が難しい小破片で、石器は 2 点ともチップである。



中央配石東トレンチ



中央配石西トレンチ

史跡上之国館跡のうち洲崎館跡・勝山館跡

—令和4年度発掘調査の概要—

調査理由：史跡整備

調査地：洲崎館跡（檜山郡上ノ国町字北村 137-1）

勝山館跡（檜山郡上ノ国町字勝山 423-1）

調査主体：上ノ国町教育委員会

調査期間：令和4年5月16日～令和4年11月22日

調査面積：洲崎館跡 250 m²

勝山館跡 150 m²

1. 洲崎館跡の概要

洲崎館跡は、天の川河口から北に約1kmの日本海に面した標高5～10m前後の砂丘平坦面上に位置し、長禄元年（1457）のアイヌとの戦いで功績を挙げ、季繁の娘婿となった武田信広が天ノ川河口右岸に築いた中世城館である。

寛正3年（1462）に毘沙門金像を納めた毘沙門堂が建立されるが、安永7年（1778）の火災で本殿・拝殿ともに焼失し、松前藩によって翌年再建されている。

2. 令和4年度洲崎館跡発掘調査成果

令和4年度の洲崎館発掘調査は2つの調査区を設定して調査を行った。

第1調査区は、昨年度に懸仏や近世と思われる建物跡が検出された周辺を拡張して設定した。

昨年度に懸仏が出土した調査区の北側では、昨年度に確認した地形と同じく、砂館神社に向かって下がるように Ko-d 火山灰が確認された。Ko-d 火山灰上層からは寛永通寶や瓦が出土している。

一方、昨年度柱穴を検出した調査区の南側では、北西から南東方向を軸とする柱間約180cmの柱痕を伴う柱穴を5基確認している。この柱穴は、Ko-d 火山灰層を壊し、柱痕下からナイロン袋片が出土するため、近現代のもの考えられる。また、令和3年度に検出した柱穴とは、柱間寸法や軸が異なることから、別の建物遺構と考えられる。

第2調査区は砂館神社北西部の谷地形を横断するように調査区を設定した。

谷地形の最も落ち込んでいる箇所から Ko-d 火山灰の堆積が確認され、昨年度調査からの谷地形との連続性を確認することができた。

また、空堀を造る際の掘り込みは明確に確認できないが、曲輪を区画する位置関係などか

ら空堀状の遺構と思われる。



洲崎館跡第1調査区柱穴



洲崎館跡第2調査区空堀状遺構



洲崎館跡第2調査区空堀状遺構

3. 勝山館跡の概要

勝山館は天の川加工左岸の丘陵地に立地し、花沢館、洲崎館のうちに武田信広が勝山館内に館神八幡宮を創祀した文明5（1473）年ごろに築城したとされる。

さらに、勝山館の後方には夷王山墳墓群と呼ばれる和人墓が点在する場所にはアイヌの墓もあり、勝山館内においてアイヌと和人の共生が考えられている。

4. 令和4年度勝山館跡発掘調査成果

令和4年度勝山館発掘調査は、鶴の池から延びる沢状の窪みの年代を確認するために沢筋を横断するよう調査区1-1、1-2、1-3を設定した。

第2調査区は昨年度検出された礎石の建物構造を把握するために、昨年度の調査区を拡張するよう調査区を設定した。

第1調査区では、縄文時代から（中期前半）から近現代に堆積した集石を検出した。

また、中世にはこの沢状の地形が沢であったことが確認され、B-Tm火山灰より下位の集石からは縄文土器や石器が出土している。

第2調査区では昨年度の調査で確認されていた礎石につながる礎石を4石確認した。礎石の大きさは約50cmでKo-d火山灰の下から見つかっていることから、中世の礎石であることも確認できている。

建物規模は、柱間が5.6尺（170cm）と2.6尺（85cm）となっており、礎石建物跡である

と思われる。



勝山館跡第1調査区全景



勝山館跡第2調査区礎石建物跡

松前町 福山城下町遺跡 (B-02-029)

事業名：松前港線改良工事埋蔵文化財発掘調査委託

委託者：北海道渡島総合振興局

所在地：松前郡松前町字唐津 10-5・11-6・11-8・13-2・14-3・15-4・18-4・19-2・85-4・85-5・86-2・87-2・88-2・89-2・90-2・91-2・92-4・93-3・94-2

調査面積：531 m²

調査期間：令和4年5月12日～9月30日

調査員：新家水奈、吉田裕史洋、山中文雄、坂本尚史

調査の概要

福山城下町は、松前藩の福山館（福山城）を中心に建設された近世城下町である。このうち、松前町字唐津、字松城、字福山の海岸沿いや河川沿いの低平地が、福山城下町遺跡として周知されている。

今回の発掘調査は、字唐津で実施される一般道道松前港線の改良工事に伴うものである。調査範囲は、同線歩道部分のうち町道唐津ヶ丘線の西側から町道海岸通り4号線の東側まで、A～Eの5地区に分かれる。各地区の標高は7m前後で、A・B地区のすぐ北側、松城小学校がある海岸段丘よりも約8m低い。国指定史跡の松前氏城跡福山城跡は、唐津ヶ丘線との交差点から北東へ約400m、標高約20mの海岸段丘に立地する。昭和51年撮影の空中写真によると、同交差点から海岸までの距離は約90mを測る。字唐津の海岸部は、近世に唐津内町とよばれた町人地で、宝曆年間（1751～1763）に制作された『松前屏風』には、松前港線の前身である福山街道の両脇に町屋の立ち並ぶ様子が描かれている。

層序はI層が現代の道路造成土、II層が近現代の造成土、III層以下が近世以前の造成土、自然堆積層である。地山は自然堆積の砂礫層であるが、上面付近から擦文土器が出土する。なお、C・D地区の一



遺跡の位置

部では、砂礫層の上に細粒火山灰が堆積する。

福山城下町遺跡の調査は、松前港線の改良工事に伴い、平成 17 年度に字松城（旧小松前町）、同 18 年度に字松城（旧大松前町、旧小松前町）、字唐津（旧唐津内町）、同 19 年度に字松城（旧小松前町）、同 26 年度に字福山（旧枝ヶ崎町）、字松城（旧大松前町）の一部が、松前町教育委員会によって実施されている。平成 22 年度には、町道朝日豊岡線代行事業改良工事に伴い、当センターが字福山（旧藏町）の一部を調査した。また、弘前大学による学術目的調査が、平成 29 年度に字豊岡の正行寺北側、平成 30 年度に字松城（旧小松前町）の一部で行われている。

遺構と遺物

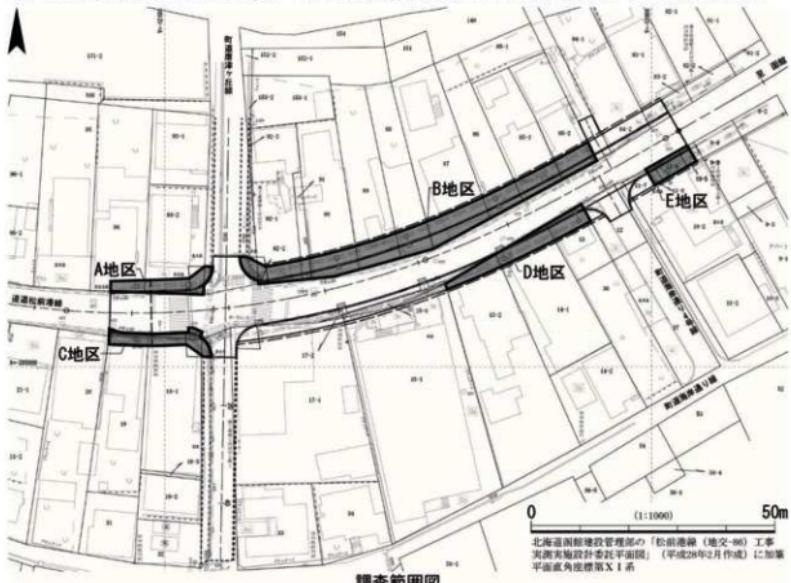
A～E 地区のⅢ層以下で、礎石 17 か所、石積 1 か所、石列 1 条、柱 1 か所、柵 1 か所、杭列 1 条、溝 1 条、炉 3 か所、土坑 23 基、磁器片集中 1 か所、木製品集中 2 か所等を検出した。

A 地区は松前港線の北側歩道部分のうち、唐津ヶ丘線より西側に位置する。地番 93-2 で礎石 1 か所、94 で柱 1 か所、土坑 3 基を検出した。

B 地区は松前港線の北側歩道部分のうち、唐津ヶ丘線と海岸通り 4 号線の間に位置する。地番 85-3 で礎石 1 か所を検出した。86 の沢状地形から舷側板の破片や漆塗椀が出土した。

C 地区は松前港線の南側歩道部分のうち、唐津ヶ丘線より西側に位置する。地番 18-1 で礎石 1 か所、19 で礎石 1 か所、土坑 8 基を検出した。

D 地区は松前港線の南側歩道部分のうち、唐津ヶ丘線と海岸通り 4 号線の間に位置する。地番 13 のⅢ層で礎石 1 か所、石積 1 か所、杭列 1 条、溝 1 条、土坑 3 基を検出した。Ⅳ層からは、炉鉢、蓋、箸、編物糸受木、下駄、杭、薄板目板、樹皮巻、布等の木製品・織織製品を中心に、陶磁器、土錘、鉄釘、小刀、錢（天聖元宝）、骨角製の中柄等が出土した。同層の年代は、陶磁器からみて 16 世紀後半～



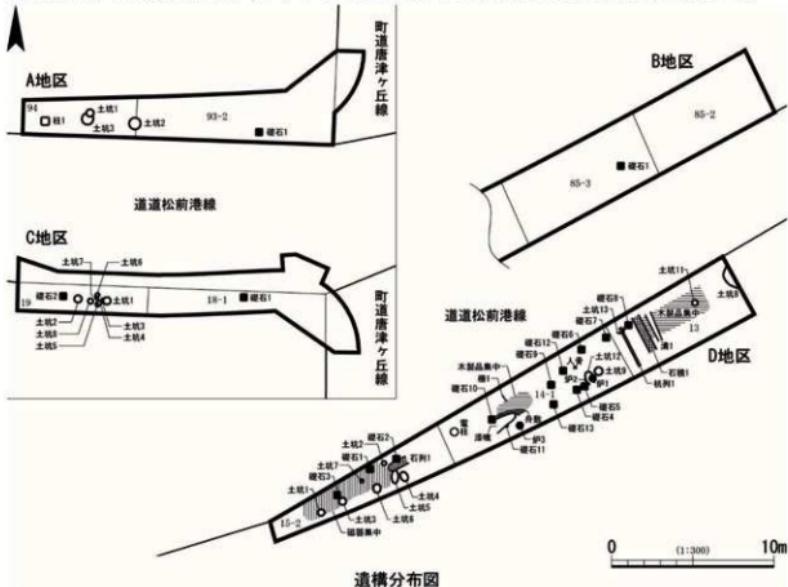
17世紀初頭と推測される。V層からは海獣骨等とともに馬の歯が出土した。

地番14-1のⅢ層では、礎石9か所、柵1か所、炉3か所、土坑2基を検出した。礎石10・11の上には漆喰が堆積しており、漆喰壁の建物が存在した可能性がある。炉1は直径約70cmの浅いくぼみで、底面付近に鋳造剥片が集中していた。炉2は炉1の約30cm下に位置する。土坑の掘削により大部分が失われていたが、埴燒が出土している。IV層からは、板縦舟の舟敷、櫂、捧酒箸、漆塗椀、曲物把手、杭、薄板目板、樹皮巻、繩等の木製品、織維製品を中心に、陶磁器、鉄釘、骨角製の中柄等が出土した。陶磁器からみた同層の年代は、地番13と同じく16世紀後半～17世紀初頭と推測される。舟敷は長軸両端と一方の舷側が欠損しており、長さ約3m、幅約50cm、厚さ約4cmを測る。舷側には22か所の孔が等間隔にあけられており、繩の織維が残存する孔もある。舟敷の上には一部が欠けた漆塗椀が伏せてあり、その内側からアワビの貝殻が見つかった。このほか、14-1では人骨の一部も出土している。

地番15-2では、礎石3か所、土坑7基、石列1条を検出した。IV層上面（火災面）では、17世紀前葉とみられる中国産磁器の破片がまとめて出土した。

E地区は松前港線の南側歩道部分のうち、海岸通り4号線より東側に位置する。大型掘込の埋め土が大部分を占める。

遺物は陶磁器・土器・土陶磁製品約20,000点、金属（鉄・非鉄）製品約2,500点、木製品・織維製品約600点、石製品約20点、骨角製品約20点、ガラス玉約20点等が出土した。陶磁器・土器は肥前系陶磁器を中心に、瀬戸・美濃系陶磁器、中国産磁器、擦文土器等、土陶磁製品は瓦、風炉、輪羽口、埴燒、土鍤、土人形、箱庭道具等がある。鉄製品は釘、鋸、小刀、鑿、錢、鉄滓等、非鉄製品は銭（寛永通宝主体）、煙管、簪、座金等がある。木製品・織維製品は上述したとおりである。石製品は礎石、硯等があり、骨角製品は中柄が多い。ガラス玉は青色の小玉や青緑色の蜜柑玉等が得られている。



第43回南北海道考古学情報交換会発表資料集

2022年12月3日発行

発行 南北海道考古学情報交換会
